

俳句雜誌

令和六年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第二号

水明

2024 2月号



《今月のかな女》

洗濯しつゝ、路の臺二つ見つけゝり

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

柏木のかな女宅。勝手口の近くに井戸があつたのか。スイッチを押せば、自動で洗いから脱水まで全てやってくれる今の洗濯とはほど遠い手作業の洗濯であつた。作業の傍らふと目を転じると、地面から頭を出している路の臺を見付けた。目を輝かしたかな女の様子が見えてくるようだ。路の臺や土筆は、春の訪れを逸速く伝えてくれる。見付けた後、かな女はその路の臺をどうしたのか、興味がわく。

(鬼之介・註)

水 明

第1121号

— 華の一句 —

短日や見るとはなしに小津映画

石川理恵

明治三六年生れの小津安二郎。日本を代表する映画監督の一人で、無声映画の時代から昭和の戦後にかけて多くの映画を撮った。それ等の中で、原節子主演の「晩春」「麦秋」「東京物語」など、ローポジションによる撮影や厳密な構図の小津調と言われた映画への想いが深い。少しその場を離れていても映画の場面は替わらない。何度も観た小津映画への思いが、よく表された俳句である。

(鬼之介・推薦)

水 明

令和 6 年
2 月 号

今月のかな女

華の一句

おはこ (作品)

凝 鮎 (近詠)

ジャムづくし (近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

一月号の巻頭句

六華明苑

櫻花桃李

六花

回顧

山本鬼之介

茂木和子

永野史代

町野広子

檜鼻ことは

柚木治子

網野月を

由良ゆら女

ほか

高島寛治
大場順子

松井由紀子
ほか

河野はるみ
笹本啓子

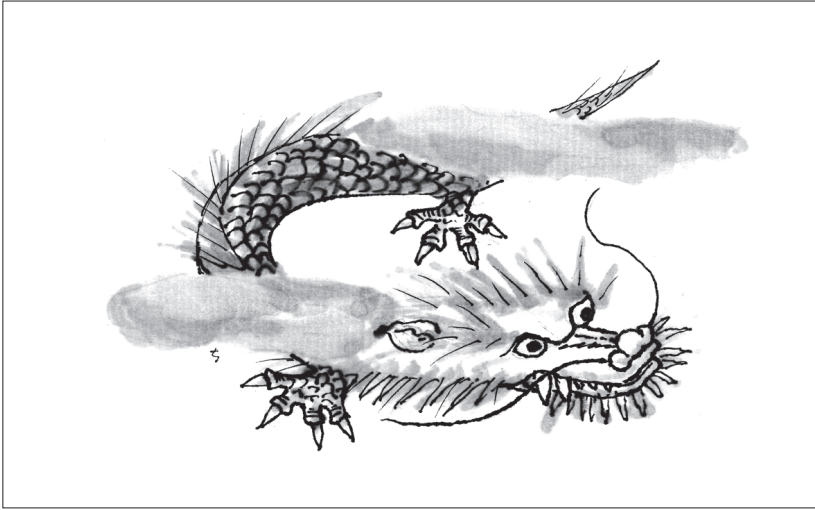
石田慶子
ほか

関根誠子
網野月を

石井 喜恵

大橋 旭代

菊池ひろこ



「水明」年間作品

随所作主
 櫻花爛漫
 一陽來復
 竜天に
 感動

俳誌望見
 句集喝采

水明集

元田亮一
 西幅公子

反町 修
 ほか

水明集作品評

水琴窟 (水明集十二月号鑑賞)

鼓笛集

山紫集

インターネット句会のご案内

水明例会報・各地句会報

新珠賞作品募集

水明忌・春の吟行会のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

80	83	78	72	69	67	63	52	51	50	48	46	44	42	40
								曲淵徹雄	染谷風子	松宮保人	星野和葉	島津初花	境延昭	五明昇

おはこ

山本鬼之介

花丸を付けてやりたき冬の月

門の一途な構へ去年今年

襲名の楽屋暖簾に淑気充つ

手づからの組紐しめて初句会

持ち歌は未だ「王将」新年会

冬うららお江戸であれば抜け参り

練堀のほどよき高さ寒椿

歩兵聯隊跡に情趣を冬櫻

凝

鮒

茂木和子

拭き込みし大黒柱冬座敷
開け閉めの襖に忿怒の龍の駈く
継ぎ接ぎの継ぎ目に襖の時思ふ
にぎにぎと母と語りぬ凝鮒
度忘れの言葉もどかし石露の花
戸籍簿の大字小字冬座敷
不意に出た結婚話冬座敷

コロナ以来何かと家に居る事が多くなつた。昨今、庭に飛んで来る鳥を眺めたり咲く花と会話をしたり……と。ならばもつと句作に励めと云われるかも知れないが、俳句とは努力はするが励むものではないと思う。俳句はその瞬間を切り取って詠めと云われるが、その瞬間が難しい。だんだん時代遅れの人間になつてしまうのかな、いや、長い間その時代をしっかりと生きて来たのだ。

ジャムづくし

永野史代

短日の夫が厨に灯を点す
電飾をきらふ喪帰り冬の星
灯されぬ裸木さみし裏通り
指のつめたき人はやさしい冬夕焼
たましひいくつ失へりガザの冬
日向ぼこ天国へ攫はれし父と母
十二月八日蒼天に深呼吸

はてさて何を書こう？予定より早い原稿依頼に戸惑いつつ庭の木を眺める。柚子が一杯！そうだ夫の退職後の様子を、と思いつく。主にジャム作り。今までざっと二十五種強。林檎、無花果、茱萸、榎櫨、杏、梅、リュウバップ、木瓜の実……。変り種はコリンキー、バターナツククロツシユ。鬼柚子は昔句会でへ鬼柚子と云ひて座りの悪しき尻」と作り笑われた。序でにパンも焼く。食パン類、ミニバゲット。クグロフはお手のもの（アルザスワインと）。厨は夫に占領され食事作りまでも！ホルシチ、スベアリップ焼、コッコオパン……。私は楽楽。時に庭の草花を一輪挿しにする実験屋の夫とそれに気付かぬ鈍感な妻。

まだ戦の絶えぬ世。ガザの人人の哀しみを想うと涙、涙。水明塾で李何氏が講義をされた。昔からの知り合いなので懐かしい。悲喜こもこもの日日である。

風 琴

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

◇新学期（十一月号）

少年に校門遠し休暇明け
秋の校庭海思はするソーラン節
見守りの放送ひびく鰯雲

柚木治子

◇三方石観音（十一月号）

竜が噴く観音霊水岩清水
静けさや御堂にひびく鹿威し

鳥羽和風

日常の中の一コマ。始業式の朝、遅刻した少年と出合う。校門に入りづらい少年の胸中を思い遣る作者。やがて迎えに来た教師に肩を抱かれ校内へと消えた少年。心優しい作者の安堵が伝わって来る。小学校の校庭から連日流れて来る「ソーラン節」秋の運動会も近いのである。勇ましい踊りが早く見たいと思う。多勢の子供達でのそれは、どれ程に見事で晴れやかであろうか。先生方のご苦労の報われる一瞬である。日も短くなり、夕方のチャイムも冬時間で早くなる。鰯雲が見事である。さあ帰ろう。すぐに暗くなるよ。

母に似る丸い時計と望の月
背すぢ伸ばぶ竹刀の音や夜の秋

丸い時計は壁に掛けられた物か、若しかして形見の腕時計かも知れない。今日は十五夜。丸い物は優しさを醸し出し、何となく母に繋がる。触れた時の暖かさ、柔らかさ、言葉の優しさ、懐かしい声全てが丸い。母とはそんな存在である。一心に竹刀の素振りをする人。背すじの伸びたその姿は、心の迷いを断ち切る。夜の秋と空を切る竹刀の音が清々しい。

弘法大師縁りの観音像のある三方（みかた）。右手首のない観音像は不動岩に彫られ、本堂はこの岩を背負う様に建てられて居る。竜の口から噴き出る霊水でお清めをし、御堂へと進む。自然の中にある御堂辺りには、鹿威しの音が響き渡り、より一層静寂を感じる。当観音堂は、北陸三十三ヶ所霊場の七番目札所である。

六万の手形足形秋の山
提灯に金田正一花梨の実
苔むした鶏鳴石や秋時雨

観音様は何時からか、手足の不自由な方々の信仰の対象となり、木片で形どった多くの手形足形が収められている。又奉納されている提灯の一つに、嘗ての名投手「金田正一」の名を見つけた作者。スポーツを生業とされた方故、何処かに故障が生じたのかも知れない。鶏鳴に夜明けを知り、未完のままに大師が立ち去ったとの由来の鶏鳴石も、今は苔むして歴史が偲ばれる。筆者の故郷敦賀からは小浜線で六つ目の駅。小学校の遠足で行った微かな覚えがある。常に地元を見守っていて下さる作者に、只々感謝するばかり。

◇曼珠沙華（十二月号）

椎野美代子

曼珠沙華昼を灯せり宝石店
赤い川否畦道の曼珠沙華

秋分の頃を待っていたかのように咲く曼珠沙華。それは、松明を思わせる花であり、美しくも妖艶な感じさえ受ける。「昼を灯せり」は、宝石店でもあるが、曼珠沙華の華やかさと宝石の輝きが、共に中七に係るのかと思う。花の特徴を言い得ている。二句目群れ咲く花に、一瞬赤い川かと思いきやとした作者。なんとそれは畦に添って咲く曼珠沙華であった。「否」が衝撃的で、新しい作句法を学ばせて戴いた。

まんじゆしやげ蝶蝶とばかり触角を
曼珠沙華どこかの罌がはじけてる
曼珠沙華マスクの内の唇化粧ふ

幾つもの別名を持つ曼珠沙華。昔の歌に「赤い花なら曼珠沙華」とあるが、真紅の花が輪状に咲き、長い蕊を持つ。作者はそれを蝶の触角と見た「触角を」で余韻を残す事で、より花を想い浮かべる。罌がはじけるとは、何かが掛かったのか、この花にはそれを想像させる物がある。曼珠沙華と罌とを繋げた作者の発想、感性。四季を問わず、国中でマスクが常となつて約五年。当然の事口紅を使わなくなった。この花の色の紅い紅を、マスクの内の唇に差してみる。化粧う事を忘れずに。作者の故明世師への敬愛は深く大きい。その作者を憧憬の念で、遠くからそっと眺めて居る筆者です。

◇明石海峡大橋（十二月号）

森本早苗

秋高し小さく渦巻く明石の門
吊り橋はハーブの化身鷹渡る
連絡船秋夕焼へ舵を取る

神戸の舞子浜から淡路島へ架かる全長三九一メートルの大吊り橋が出来て二五年。人々の生活も大きく変化した。しかし、自然は昔のまま。明石の門（と）呼ばれる海峡。空が高く見下ろす海の渦は小さく見える。晴れ渡った秋の対比である。あれ程長い吊橋を架ける技術を産み出した頭脳に敬服。橋の鉄骨の造形は、最大の強度の構造の元あの形なのである。うが、美しく正にハーブです。海からの高さとななる鉄骨の高さ「鷹渡る」が力強い。橋が出来ても連絡船は無くならず、海流と渦を掻い潜り人々を運んでくれている。

秋うらら舞子の浜に糸垂らす
秋澄むや国生みの島父祖眠る

大橋の見える舞子の浜は、神戸市民にとってこの上ない憩いの場なのである。漁港である他、緑地、砂浜、温泉、花火、海水浴、潮干狩り等々あらゆる楽しみが揃っている。又、掲句の様に釣好きには絶好の場でもある。日本で最初に生まれたい島と言われる淡路島は「国生みの島」と呼ばれている。

此処が作者のご出身なのでしょう。橋が出来て往来が易くなり、帰省も墓参も又、旅行も気軽に身近になった事でしよう。何時も身辺の地を詠まれ、遠方の私達に心の旅を届け、楽しませて下さる作者なのである。

ゆずり葉

◆季音十二月

檜 鼻 ことは

もくせいひの匂へば仰ぐ杖立てて

栢尾さく子

日々の散策を楽しまれている方は多いだろう。歩き馴れた散歩道、毎日同じ所を歩いても退屈はしない。季節の移ろいを五感で感じ、昨日は蕾だった花が開いていたり思わぬところに思わぬ花が咲いていたり、何かしらの新しい発見が愉しいからだ。金木犀の葉は一年中緑のまま、冬になっても葉を落とすことはない。だから、普段はあまり気に留めることのない樹木である。ところが、九月も半ばを過ぎるころ、橙色の小さな花が咲き出し、仄かに甘い香りが辺りに漂いだす。優し気な金木犀の芳香に足を止め、自然と鼻腔を近づけたくなる。まさに「匂へば仰ぐ杖立てて」である。作者の仕草が微笑ましく美しい。

夫を待つ面影橋の秋の暮

鈴木康世

固有名詞をうまく使うことにより句が詩情豊かなものにな

ることがある。実際に訪れたことはないのだけれど、面影橋は西早稲田の神田川に架かる橋、面影橋の名の由来は悲しい物語だ。この地に住んでいた和田鞠負という武士の娘、於戸姫は夫を殺した男を追いかけ仇をとることに成功するが、自分の身に次々と起こる不幸を受け止めきれず、神田川に身を投げ自ら命を絶ってしまった。村人は於戸姫の死を哀れみその面影を偲んだという。「夫を待つ面影橋の秋の暮」この逸話を句にしただけではなく作者の心象風景でもあるのではないだろうかと思ふ。静かに流れるような措辞が美しく、下五の「秋の暮」が句の情景をいっそう深みのあるものにしてている。

実葛^{まねかつ}牛車の停まりさうな宵

梅澤佐江

この句を読んで藤原定方「名にし負はば逢坂山のさねかつら人に知られでくるよしもがな」の和歌を思い起こすのは私だけではないだろう。誰にも知られないように恋しい相手と連絡を取りたいという人目を忍ぶ恋心を歌った和歌。この和

歌を素地にして掲句もまことに雅で艶やかな一句。「牛車の
停まりさうな宵」の措辞にひそやかなときめきを感じてしま
う。牛車は平安時代の貴族の乗り物で男性が乗るときは簾を
上げ、女性のときは下げるのだそう。なにやら艶っぽい宵の
景色が品よくさり気なく詠まれ、読んで楽しい一句であった。

嵯峨野路に鐘の音流る去來の忌

上戸千津子

嵐山から奥嵯峨に入ると、人もまばらになり、藁葺き屋根
の民家や街道沿いに立ち並ぶ古い町並みを楽しみながらのん
びり散策することができる。愛宕念仏寺より、化野念仏寺、
祇王寺、滝口寺、二尊院、そして去來が住んでいた落柿舎あ
たりまで、実に楽しい散策である。二尊院には「幸せの鐘」
と呼ばれている鐘楼があり、参拝の方が鐘を三つ撞いてそれ
ぞれに「幸せ」を祈願する。小倉山に流れる鐘楼の音は足を
止めて耳をすましたくなるほどに静かで厳かな響がする。「柿
主や梢はちかきあらし山 去來」いい旅をされたことだ。

ささやきを聞き漏らしさう虫の声

保坂翔太

虫の音が告げる秋の訪れ。鈴虫や蟋蟀の声を聴くと心が何
かしら落ち着くとともに季節の移り変わりに一抹の寂しさを
感じる。ある学説によれば、虫の音を西洋の人たちは音楽脳
を司る右脳で処理するのに対し、日本人は言語脳を司る左脳
で受けとめているのだそうだ。つまり、日本人は「虫の音」

を人の声と同様に言語脳で聞いているため自然の音を音とし
て認識するのではなく、自然から発せられている言葉として
認識しているということになる。「虫」の音だけではなく、
「風」「雨」「小川のせせらぎ」の音も言葉として聞くがゆえに、
情緒的とも言われる日本人ならではの感性で、自然を愛でる
ことができるのかもしれない。

ささやきを聞き漏らしさう虫の声 美しい調べに何度でも
声に出して読んでみたくなる句である。

名画座に昭和の余韻秋の虹

染谷風子

昭和は、「俺たちに明日はない」「慕情」など、外国映画の
題名に邦題がついていた時代だった。ところが最近の外国映
画の題名はやたらに片仮名が多い。ようするに英語の題名の
音声カタカナで書いて邦題にしているにすぎない。これに
は理由があつて、世界同時公開が常となった現在、映画の内
容を見て邦題を考える時間がなくなってしまうからなのだ
そうだ。封切館での公開を終えた作品、はたまた、過去に上
映された映画を観ることができると名画座。座席数も少なく、
いかにも使いこまれた館内に張られた名画のポスターを見る
のもたのしいものだ。名画座で見た「自転車泥棒」「家族の
肖像」は今でも心に残る。いい時代だった。この日、作者が
楽しめた映画は何だったのだろうか。「秋の虹」が心地よい
余韻に浸る作者の姿を静かに伝えてくれる。

季
音
雪



閑かな刻
柚木治子

待ちをれば隠れ家めきぬ冬座敷
日向ほこ生きる証の爪を切る
気位は王妃さながら大白鳥
花枇杷の芳香に野鳥止む夕べ
伝言板にスマホ似通ふ冬の星

烏兔匆匆
由良 ゆら女

居ぬ母を呼ぶや振り向く冬ごもり
まなこからとろけてゆきぬ日向ほこ
極月の京に役者の一睨み
日輪はビルの向かうをクリスマス
風花の黒門市に烏兔匆匆

六義園界限 網野月を

山眠る 石山かつ子

築山の石笑ひ出す冬日向
名草枯る光優れて千草枯る
小春日や黙字を添ふる水香江
紅葉狩世間話に興じたり
石組の島を浮かせる冬の池

夜となり風が風呼ぶ根深汁
赤城の山を一網打尽に空つ風
白菜に鉢巻列の整ひぬ
眠る山笏となりてチェンソー
生きざまに言ひ訳はなし山眠る

翳りゆく 石井喜恵

枯野宿 大橋廸代

翳りゆく窓辺に匂ふ榎櫃の実
襟巻に潤む瞳や今小町
煮凝や古き炉端の手酌酒
煮凝や少し反りたる落し蓋
百歳がどつかり座る冬座敷

大银杏もみぢの靈氣ふりかぶる
七半の男盛りが枯野宿
きそひあふ金管楽器枯岬
縁切りの絵馬は鎌形空つ風
笑みたまふ頬切地蔵よ枯野星

硝子絵 大村節代

白襖からぬつと顔出す旅芸人
煮凝に蘊蓄多き客集ふ
鴨の声古城の中の喫茶店
硝子絵に異国の少女冬紅葉
ここからは神の領域冬紅葉

鷹の天 栢尾さく子

身辺に深まる暮色冬の雨
着ぶくれてもうときめかぬ身をつつむ
試歩の気になり歩く冬帽子
前世より来世へ自在鷹の天
枯野行く詰め寄る如き夕日見て

落葉 菊池ひろこ

ラジオ置く高所開戦記念日来
熱爛をゆつくり冷ます厚化粧
爛酒や松葉匂へる風ありき
聖樹の灯帰郷途上の子へ点滅
落葉する南の島に飛べない鳥

冬浅し 五明昇

友の墓眠る故山と差向ひ
国盗りの城を戴き山眠る
水鳥や近江の海に暮の鐘
都鳥河岸に零るる木遣唄
襖絵の龍虎相撃つ嵐の夜

パンク自転車

境 延 昭

冬 め く

島津初花

沈金の箱に鍵穴神の留守
朴落葉踏んで水場にたどり着く
鉄匂ふ永代橋に冬の月
冬座敷隅に座布団積んである
坂を押すパンク自転車冬の雲

体感の日毎に変はる枯野原
鯛焼や家族の温もり恙無し
草紅葉紅を残せしえびす飴
冬めくや屋台の並ぶ景遙か
玉串七本並べ晩秋の句を綴る

冬 の 雲 椎野美代子

都 鳥 鈴木康世

雲形定規に象られつつ冬の雲
正面切つて冬雲群団来るは来るは
冬の雲阿呆のごとく鯉の口
空耳はゼロファンの音冬の雲
一と駅を歩いて冬の雲親し

屋形船のあと先に群れ都鳥
此の先は昔色街都鳥
都鳥粹な御仁の撥さばき
橋三つ越ゆる逢瀬や都鳥
都鳥悲しき民話残る川

歳 晩 田 寺 玲 子

日がな鳴る摩耶の風鐸北風
大枯野かつて零戦離発着
歳晩の大漁旗吊る魚うをんな棚
酒蔵の古りし煙突月冴ゆる
短日や沖の泊船灯をともす

神 楽 笛 十 倉 和 子

大銀杏一夜哭きたるこの落葉
大門坂の僧を走らす片時雨
追つてくる熊野古道の夕時雨
大枯野ひそと満蒙開拓碑
軒先に月が来てをり神楽宿

竜 鳥 羽 和 風

初空へ竜がのたうつ天井画
綾取りの糸取り合うて春着の子
竜が噴く寒九の水や柄杓の香
鯉起し浮きつばなしの落し蓋
雪しまきのつべらぼうの銀世界

わたくし色 永 野 史 代

今年またわたくし色に年暮るる
煮凝や夜勤の兄が食らひつく
姉の生涯骨身にしみて冬ざるる
マフラーの別れはいつも背を見て
ピリカピリカおごそかに熊祭り

木の葉降る

波多野 寿子

ストレッチ

茂木和子

鈴の鳴る糸切り鉄雪の夜
形よき冬至南瓜を両断に
亡き友の文字美しや木の葉降る
実南天形見となりしネックレス
ふと座り弾いて静かな師走かな

冬鳥と目の合ふ一瞬通ひ合ふ
無住寺の蔭に日向に藪柑子
冬の蝶介護予防のストレッチ
賑々と鳥の声する藪柑子
冬鳥の枝撓はせて移りけり

年の瀬 星野和葉

散紅葉 森本早苗

木戸の鍵外しておかう枇杷の花
花枇杷や裏口へ行くご用聞き
せかせかと過ごせし一日湯豆腐食む
湯豆腐の奉行ひまなり盃重ぬ
良きことも悪しきも啜る晦日蕎麦

きつね面着けて入りたき枯野かな
断層の露岩に一葉散紅葉
野仏の続く参道散紅葉
笹鳴きや息を凝らして追ふ行方
年の瀬の赤い帽子のアンコール

大 枯 野 矢 作 水 尾

空つ風月をおし上げ塔の上
白菜の嵩を沈めて鍋滾る
月光の輝き渡る大枯野
十国を鎮め箱根の山眠る
冬桜巢箱のやうな投句箱

山 眠 る 山 中 みどり

遠国の戦を憂ふ聖夜かな
飢餓の子の黒き瞳やクリスマス
星一つ流れ深深と山眠る
赤屋根のホテル鎮もり山眠る
山眠る通行止の鎖錆び

特集 師弟で詠む春の季語

対談 震災後の俳句と短歌

高野ムツオ×川野里子

巻頭作品10句

星野 椿・星野恒彦・池田澄子
暮目良雨・森ちづる・加古宗也
柴田多鶴子・水上孤城

俳壇

3月号

2月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
中西夕紀

八木健造 滑稽俳壇

俳壇賞受賞第一作30句……………島貫 恵

四季巡詠33句〔第Ⅳ期〕……………島村 正・和田順子

連載
知つてるようで知らない俳句用語……………井上泰至
俳人の住む町……………水内慶太・本城佐和
名句のしくみと条件……………坂口昌弘

私の本棚・私の一冊……………山本鬼之介
十二か月添削教室……………前北かおる

俳句と随想12か月 石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音月

冬の雲

高島寛治

美しき眼揃へて鰯の競り
冬雲の覆ふ我が街異境めく
ドームより洩るる歓声冬銀河
日向ほこ長き眉毛の老父かな
極月や何故か込み合ふ古着市

十二月

松井由紀子

分針の音の高まる十二月
古日記焚けり己を屠るごと
一点になりたき鴉冬落暉
利鎌もて荒れ田を渡る冬の月
落日を容れて耀く冬の雲

花簪

大場順子

古曆すつるに惜しき佳人の絵
都鳥みな京を向き隅田川
舞妓の赤き花簪や都鳥
まなうららに銀河鉄道星冴ゆる
冬うらら社に響く「越天楽」

雪白の

丸山マスキ

雪白の鷺の矢羽根や神渡
冬の朝板前修業の下駄の音
鰯を耀る潮錆びの声有磯海
熱爛や心延へ良き若女将
客の座に松風を聴く初点前

残り香

梅澤佐江

空風に別れの言葉途切れけり
山彦に託けて山眠りけり
空耳に悠久の音冬銀河
沈香の残り香まとふ冬籠
新年を待ちて整肅なる社

野性の母性

正木 萬蝶

銃口を睨む熊の母性かな
二度咲きや赤き糸切る糸切歯
産気づく厩舎そぞろに暮早し
五臓六腑の失せし一つや爛熱し
暮早しオムニバスめく山手線

大 枯 野

森 川 義 子

山山の眠りのなかの地獄谷
目的地見えるて遠し大枯野
沈む陽に光る潮目や磯千鳥
空つ 風少年 尖る 通学路
踏み外しさうな溪谷木の葉散る

年暮るる

井 上 燈 女

短日いま奥に奥ある大藁屋
百姓の名残の蔵や落葉垣
葱掘つて夕日に深く合掌す
野地藏の片頬を射る冬夕焼
子の机使はず捨てず年暮るる

枯 野 原

上 戸 千 津 子

行き行けど風音ばかり枯野原
河豚刺の透ける器の波高し
義士祭の沿路の拍手名場面
隣家より予期せぬ冬至かばちやかな
葉隠れに枇杷の花の香ひそやかに

冬 地 蔵

松 宮 保 人

低頭す句友に祝詞冬紅葉
中桶の仕度整ひ大根引く
合羽着て大根下げて立ち話
老松を傘に静もる冬地藏
是が非でも御箱を一つ年忘

絵 双 六

池 田 雅 夫

口上の一つ覚えや門礼者
人道の行きつ戻りつ絵双六
風牙ゆる夜やぼつんと一軒家
小正月男勝りの三姉妹
一山の地層となりぬ雪五尺

吹き溜り 町野 広子

あれこれ混ざる風の吹き溜り
凧や指一本で弾くピアノ
反抗期の子等の布団も干してやる
世界地図古りたる教室山眠る
畔を行く葬列長し山眠る

縄電車 荒井 俱子

冬ぬくし真綿のやうな睡魔来る
初霜やしねしね乾く根野菜
縄電車おちば二枚が乗車券
木枯が寺の大樹と押問答
熱爛に酔うて昔をひとくさり

石路の花 内田 恵子

冬紅葉ハイライト入れ絵筆擱く
煮凝や深海の底ふと思ふ
介護するも介護されるも覚悟石路の花
賢人の顔で見上ぐる冬紅葉
鯛起し指の欠けたる石仏

汽笛一声 松本 光子

月見坂白き夜なり星流る
機関車走る汽笛残して歳の暮
寒禽に鋭声一発谿に消ゆ
女子寮の夕べ明るきとろろ汁
朔太郎の生れし前橋木枯初む

初山河 渡辺 舍人

天窓に大星小星クリスマス
大布にくるまる三つ子クリスマス
聖餐に沢庵村のクリスマス
聖樹下に赤き車の停まりけり
柏手の揃ふ夫婦や初山河

冬 桜 山田 美佐尾

気高さや出雲大社の冬桜
枯野ゆく胸のダイヤにそつと手を
苦もまた楽し杖を頼りに枯野ゆく
気を静め計報の知らせ年の暮
天井の煤を払ひぬ年用意

暖か 福田千春

弾きても乳に寄りくる袖湯かな
相席のひとと熱燗酌む夜ふけ
熱燗や十八番の相撲甚句出て
人里は実り豊かや親子熊
赤き糸たぐれば夫よ神の旅

帰り花 川崎道子

待望の秘仏公開帰り花
愛猫の写真机上に漱石忌
廃校の体験学習おでん鍋
冬帽子おづおづ覗く蝮塚
木枯や転校生は又三郎

年暮るる 井関礼子

老ゆるほど歳月早し年の暮
障りなき日々謝しもして年暮るる
すは師走九十路なりとて身の程に
変りなき日々こそ良けれ年の逝く
老いたるも節の真似事などとして

冬の桜 井上玲子

蛇行する河滔滔と枯野原
鉄塔へ重く垂れ込む冬の雲
蒼天へ凜と枝張る冬桜
踏み入りて落葉時雨の雑木山
赤城山より風の礫や空つ風

十二月 大塚茂子

こぼれ行く砂のごと過ぐ十二月
十二月大石主税十六歳
亡き兄の組みし籬や山茶花道
山茶花やおかつば跳ぬる二重とび
良く走る水切石や冬の水

不夜城 近藤徹平

猫間障子に映ゆる不夜城屋形船
奥の手は真空斬りぞ鎌鼬
弔上の考はセピアや冬座敷
日輪が昇れば猛る北風
山眠り筈が返す「シーハイール」

冬の雷

野口和子

地藏ひとり佇む山路ちやんちやんこ
手土産の登利平弁当年詰まる
冬の雷目覚めの背に喝もらふ
マザコンを恥ぢるなかれとおでん鍋
数へ日や宅配の手に飴ひとつ

白湯

松山清子

つつがなく一日過せり干蒲団
白湯を飲むことに始まる冬の朝
冬晴や庭木伐られて陽の踊る
雪吊や庭師の技に見惚れたり
転地して拍子木を聞く師走の夜

枯野

西浦千枝子

山茶花や多忙な日々の退職後
駅よりの枯野の道を生家へと
去年より大きいケーキクリスマス
母作る太さまちまち大根抜く
曇る日の大和の里の山眠る

白鳥

熊倉千重子

絵タイルの舗道落葉の舞ふロンド
空つ風達磨売る声攫ひゆく
湖しづか王女気取りの白鳥よ
実験つづく研究室や冬灯洩れ
此の先も気負はず行かう枇杷の花

❖ 原稿募集

季音 (雪・月・花) 五句 (卷末添付用紙)

水明集 五句 ()

山紫集 一句 ()

鼓笛集 三句 (編集部より依頼のあった方)

※二百字詰原稿用紙使用。

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿締切 毎月二十五日必着

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇―二一

季音花

師走のひと日

河野 はるみ

黒羽根のはらり一枚寒茜
閉店間際どつとかけ込む年の暮
合唱の余音いだきて寒北斗
月光に瘤包まれて冬木立
束の間の恋も是あれ爛熟し

小春日

石田 慶子

小春日や糸のとほらぬ針にらむ
落葉掃く御苦勞様の声の行く
小春日や爺ちやんの押すベビーカー
せめてもの熊よけの鈴帯同す
ポインセチアの並ぶ出窓の骨董店

山眠る

笹本 啓子

木枯の泣く夜は熱き仕舞風呂
水子地藏を籠に抱き山眠る
山眠る獣の声か湯治宿
鐘の音に冬田の農夫手を合はす
気忙しき日々の和みの年の市

六差路

石川 理恵

短日や見るとはなしに小津映画
この街に六差路多し暮早し
焼芋喰ふ「忠臣蔵」の佳境なる
出窓より外を眺むる室の花
賀状書くチャイコフスキー聴きながら

鏡なす湖

保坂 翔太

大梁に干柿十本尼の寺
鏡なす湖を彩る龍田姫
棹差せば魚影散りゆく水の秋
名刀の妖しき刃文文化の日
初冬や江戸のめ組の竜吐水

赫灼と 曲淵 徹雄

赫灼と雲よせつけず冬の月
差し潮にきしむ艦綱都鳥
凧や白衣観音身を曝す
鉄柱にからむ寄生木北吹けり
佇める雲の一片冬紅葉

鰯しやぶ 横山 君夫

木曾馬の目よりこぼるる冬の星
日向ほこ浄土に半ば居る心地
風花やダンサーを待つ楽屋口
汜濫の痕跡残し川涸るる
鰯しやぶの脂さ走る氷見の宿

十二月 渋谷 きいち

肅肅と母の欠けたる年用意
母親の居場所虚しや隙間風
熱気球とぶ渡良瀬の十二月
初霰湯気も豊かに漁師なべ
三たて蕎麦にゐらぬ講釈忘年会

王道楽土 染谷 風子

凧の叩く鎧戸駅の裏
少なくとも友達以上焼鳥屋
両の手に包む日溜り柿落葉
凍星やかつては読みし毛語録
王道楽土何処にありや寒北斗

武蔵の国界限 日高 道を

笹の葉に弱酸性の時雨かな
空つ風橋の小町を狙ひ撃ち
凧やツインタワーに北南
空つ風武蔵の国を縦に裂き
密やかになほ密やかな冬桜

年惜しむ 青木 鶴城

蹲についばむ鳥や実千両
鉄瓶の湯気の侘び寂び冬桜
晩節の募る帰心や大根汁
冬ざれや舞鶴港に悲喜の数
梵鐘の余韻を曳きて年惜しむ

冬 桜 野田静香

快復の兆し舞ひ込む冬桜
紅の膝掛選ぶ美容室
カラフルな靴下届き年惜しむ
讚美歌のピアノ伴奏聖夜劇
冬桜友を励ますランチかな

冬のある日 檜鼻ことは

初雪やいつもの場所では会ふ人
赤色の手袋ふたつ買ひにけり
大根や笑ひ声する勝手口
山茶花の垣根探して友の家
顔見知り増えてマスクの診療所

去年今年 原田秀子

研ぎ上げし庖丁浸す冬の水
風物の友禪流し冬の水
厨女もバトンパスして去年今年
洒落つ気もまだ残り居り去年今年
去年今年だるまの髭は鶴と亀

港 町 野村美子

北浦に沈む太陽暮早し
年の夜や船接岸の港町
年の市手技見事な飴細工
廃線の信濃トンネル山眠る
山眠り尾瀬の山小屋無事に閉む

仏 飯 松島寛久

仏飯の煮大根婆いただきぬ
大根や薬石の魚板鳴り始む
大根や宝ジエンヌの足高し
早世に初雪の声星の声
雪合戦帰らぬ友の実家朽ち

聖樹の灯 宮崎チアキ

字書引けば同音数多石露の花
未来ある子等に届けよ聖樹の灯
人の世の乱れを怒る空つ風
紅深きままの落葉や流れゆく
整整と片付く机上新日記

息白し 飛永 鼓

若嫁の腰に余力や大根引き
出し忘れの文をポストに息白し
まだ少し頑張つて見やう息白し
見なれたる庭にふと見る冬木の芽
天を突く木蓮冬芽輝きぬ

山眠る 野平 美紗子

父眠る明日香の山もまた眠る
冬の月流離ふ雲に姿消す
手入れせぬ里の枯芝花一輪
枯芝の遥か向かうに東京タワー
年の市綿菓子両手に闊歩の子

冬の雲 下川 光子

新ビルに突き上げらるる冬の雲
じやんけんのいつも後出し冬の雲
夜廻りの影にぎやかに子供会
メルヘンや銀杏黄葉のアスファルト
いつの世も猫に癒さる漱石忌

冬温し 田中 章嘉

異邦人紅葉を見るマナー悪し
万両の実を飯事に小さき手
気忙しく人の行き交ふ師走かな
冬温し沼の辺にかな女句碑
青年部師走の神社大掃除

室の花 瀬戸 雄二郎

人生の節目節目に室の花
室咲の花も美し銀座の夜
室の花深夜のナースステーション
室の灯が伊良湖灯台より明し
室の花都心の墓は肩寄せて

流星群 葛城 千世子

朝散歩川面にはしやぐ夫婦鴨
情報の多きに惑ふナビ小春
インター出で迷路に入る枯野原
極月や幾度出入りす流星群
抽選の最後はバッグ年忘れ

木 枯 し 鈴木 玲 子

マフラーをなびかせ齒抜け児の笑ひ
凧として足湯ゆるがぬ大道芸
張込みの刑事コートの襟立てて
着ぶくれていつの間にかやら国訛
色の褪せたる鞆で闊歩冬の朝

冬 紅葉 高橋 満耶子

冬紅葉風のくれたる髪飾り
山伏のほら貝ひびき山眠る
出つ張りの正体あらは枯野原
裏金に右往左往の年の暮
今年は「税」一位となりて年暮るる

続・続・令和の新創刊

特集

「あかり」「ASYL」「あふり」
「亜流里」「麒麟」「ことごとく句」
「さら」「雫」「青麗」「雪天」「像」
「月の森」「初桜」「風信」「三日月」

☆巻頭三句

津川絵理子

古賀しづれ

谷口智行

加藤耕子

二川茂徳

西池みどり

☆今月の華

遠藤由樹子

山口昭男

☆俳句と短歌の10作競歌

千葉皓史

日高堯子

「対岸」吟行記

今瀬一博

☆好評連載

成瀬政博

筑紫磐井

坂口昌弘

青木亮人

大西朋

井上泰至

神作研一

藤村公洋

堀田季何

二ノ宮一雄

諸家書架

一望百里

2024年3月号

2月20日発売
定価1100円(税込)

俳句四季 Haiku Shiki

2024年3月号

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明十二月号）

関根誠子（「炎環」同人）

男七人やつさもつさの松手入 大橋迪代

『満月』五句中の一句。都心でも以前は松を植えた住宅がまだ見られたが、最近では大きな松を見掛けるのは神社やお寺くらいになった気がする。場所によつては雑草も貴重な存在になりつつある。駅前通りのアスファルトの割れ目から生えた雑草が「ど根性何々」と呼ばれ、界隈の話題になってテレビニュースにも登場する時代だ。こんな小さな自然でも人々を癒す力がそんなにあったのかと改めて驚く。

句中の松は男衆が七人で手入れするのだから、樹齡何年という大きなものが何本もある場所なのだろう。「やつさもつさ」のたった六文字に読む方の記憶の扉も開いてきて、庭師達の機敏な動き、また静寂の中のある種の賑わいなどが懐かしく脳裡に広がって来る。見ていても伝わってくる枝を切り落す時の気合、慎重な選別を必要とされる両手の動き、また切られた葉や枝が地上に落ちる瞬時の音等々。日本語はオノマトペの数が世界でも有数の言葉と云われる。それと俳句形式が上手くかみ合うと、表現効果は何倍にもなるが、そのお手本の様な一句と思つた。

牛の背に濤音を聴く赤蜻蛉 五明 昇

「秋景」五句中の一句。一読、海に囲まれた島か、海を臨む切岸の上にあるような牧場の景が浮かぶ。竿の先が好きな蜻蛉は大きな牛の背のどの辺りに止まったのだろうか？ 試しに写真を見ると牛の背には首の付け根・肩・腰骨の上と三か所の、僅かだが盛り上がった場所があった。

ゆっくり草を食んでいる大きな牛の背の少し小高くなつた腰のあたりに、どこからか飛んできた赤蜻蛉が当り前の様に来て当り前の様に翅を休めた。微かな感触の変化を牛も気付くが、さほど表情を変えする事もなく、知らぬ様子で草を食み続ける。蜻蛉は牛の咀嚼を邪魔しないように息を合わせているのか、すでに牛の一部になった様子である。昔から絶え間なく聞こえてくる濤音は牧場の大地のリズム、そこに生きるもの達の揺りかごの唄。その中で牛は永遠の様に草を食み、蜻蛉は赤い翅の色も愛らしく安心しきつた様に牛の背に翅を伏せ、濤音に耳を澄ます。この句は決して平和とは言えない現代の緊張と不安に彷徨う私達に、和やかなひと時を与えてくれた。

現代俳句鑑賞

網野月を

地下鉄の隣の席のポインセチア

池田澄子

〔俳句四季〕12月号・巻頭句より

「地下鉄」の車両に乗車しているのである。鮮やかな「ポインセチア」の二色のコントラストが作者の視線を捉えている。他に「数え日のそこは予定を入れない日」「花柄毛布おろかしく我が体温に」がある。

ベーコンも蕪も五ミリ幅の音

こしのゆみ

〔俳句四季〕12月号・兎来るより

俎の上で包丁を手に行っている「音」であろうと思われる。同じ「五ミリ幅」に刻むのであるが、刻む被体がかわれれば、その包丁の音も自ずからかわるのである。他に「左手がはかる左の足の冷え」「わたくしの弱いところに兎来る」がある。

何時よりの釣月軒のかたつむり

井上弘美

〔俳句〕12月号・南蛮酒より

「何時より」は座五の「かたつむり」を修飾していると筆者は解した。もしかしたら三五〇年余前からそこに居ると思

われるほどの存在感をこの「かたつむり」は有していたのであるまいか。そのゆったりとした動きに「かたつむり」の余裕のようなものを作者は嗅ぎ取っている。

ずぶ濡れて蠟螂上り来る青木

橋本 直

〔俳句〕12月号・飄々とより

上五の副詞的措辞である「ずぶ濡れて」は句全体を大きく把握している。「蠟螂」は「ずぶ濡れ」であるのはもちろんだが、「青木」もまた「ずぶ濡れて」いる。そして景を俯瞰している作者ご自身も「ずぶ濡れて」いるのであろう。

ふいに疑心涸れ川の石裏返す

中山宙虫

〔俳句界〕12月号・新作巻頭より

裏返した石には何が隠れているのだろうか。「涸れ」た川には、一見何もないように思えるのだが、そこに生あるものの気配を作者は感じ取ったのである。それが「ふいに」に凝縮されている。他に「立ち枯れの昭和の空を買い取ります」がある。

クレインの動きは鈍く冬入り日 大輪靖宏

〔俳句界〕12月号・地の底の声)

座五の「冬入り日」の動性、つまり動きの速度感に比した時の「クレインの動き」に鈍さを感じているのである。秋の入日の忙しなさに比べて若干の緩和を感じる「冬入り日」の速度感をまずは設定して、その動性よりも緩慢な「クレインの動き」を作者は見詰めている。他に「地の底の声の聞こゆる冬夜かな」がある。

ふるさとにゐる望郷の秋の雲 岩岡中正

〔俳句界〕12月号・私の「望郷」より)

通常は「ふるさと」から遠く離れてこそ「望郷」の想いをするものであるのだが、その常識を踏まえてのパラドクスのな意味合いである。空間としての「ふるさと」と心の時間軸を想定した「望郷」が座五の季語「秋の雲」に拠って担保されている。

秋曇油紋広がる運河かな 伊藤政美

〔俳壇〕12月号・紅屋橋界隈より)

「広がる」のは進行形つまり動作動詞ではなく、状態動詞として解釈した。「運河」の淀みの水面に作者は「油紋」を認めたのであり、曇り空であるからこそ水面にてかる鈍い光を見出したのである。そこには「油紋」と雲の影が二重写しになっている。

オペラは「魔笛」冬の月食はじまりぬ 遠山陽子

〔俳壇〕12月号・臘月より)

モーツァルト作曲のオペラ「魔笛」のことである。ゾロアスター教の構成やフリーメイソン結社の背景へも想像が広がる。句意としては「魔笛」という一大叙事詩が「月食」ともにはじめられる、ということである。やがて月食という天体ショーが終焉するとゾロアスターが優勢になるのである。他に「臘月や予は昼寝とて逝かれたる」がある。

許されて山門を入る冬螢 長介はるか

〔俳壇〕12月号・星の夜より)

座五の季語「冬螢」を主語として読むことが出来る。「山門」とあるので何処かの寺院が想定されるのだが、「冬螢」が「許され」るのであって、仏の御手の慈悲心が横溢しているように感じるのである。中七の後に切れを感じて、作者ご自身が入山すると解釈することも出来るかも知れない。他に「兎とふやはらかきもの戦止めよ」がある。

葛の花日の落ちかかる大草原 曲淵徹雄

〔俳壇〕12月号・長十郎より)

叙景に徹した作句である。その叙景の句の中に作者が確固として存在している。句意としては上五の季語である「葛の花」が咲き、夕日を受ける河原が何時もより大きく感じた、ということであろう。「大草原」の把握が作者のオリジナルなのである。叙景句の中に作者の感性をそっと忍ばせた秀句である。他に「爺婆と棲みし一つや長十郎」がある。



一月号の巻頭句

季音 雪 黒々と石の撫で牛七五三 山中みどり

季音 月 行く秋や「あやとりばし」の朱のうねり 松井由紀子

季音 花 一枝の影を映して冬障子 原田秀子

水明集 風格の満つる盆栽後の月 岡田宣子

鼓笛集 三味の音は初心四温の隣家より 佐々木史女

山紫集 花木槿蕾のごとく落花せり 後記朝香

令和5年

年間作品回顧

期間

〈 令和5年1月号 〉

〈 ~令和5年12月号 〉



六華明苑

石井喜恵

大橋迪代

三世代交はすラインのなづな粥
鶏鳴の太く短し花の城

新春のお孫さんとのスマホでの会話でしょうか。若やぐ霧
困気が伝わります。満開の桜に囲まれた城。太く短く鳴く鶏
の声に、古の城の栄枯盛衰に思いを馳せたのでしょうか。

ペーロンや風をきり裂く權さばき
今日よりはちびりにすべし冷し酒
あけ放ち月と添ひ寝をたのしめり

ペーロンとは長崎で毎年六月に行われる有名な行事で、
二十名〜三十名が乗り込み太鼓や銅鑼を打ち鳴らして競漕す
ると解説されている。「風をきり裂く」とは見事な措辞。勇
猛果敢な様子が眼前に浮かびます。三句目「月と添ひ寝」と
はさぞや風流な夜だったことでしょう。

栢尾さく子

正月の仏間に鉄腕アトムの絵
わた菓子のほのかな甘さ春近し
残生に願ひごとあり雲の峰

厳肅な仏間に不釣合な鉄腕アトムの絵。其と無く故人の人
となりが思われ、其処に座す作者の沁み沁みとした心持が伝
わります。二句目、わた菓子は祭りの時の出店の定番です。
あのふんわりと甘い食感、もうすぐ春ですよ。

立ち上る思ひ出数多りんどう忌

もくせいの匂へば仰ぐ杖立てて

水明の歴史の長きを知る作者。かな女師の忌日に因む「り
んどう忌」には殊の外深い思いがあるのです。しみじみとあ
あ今日は又、金木犀の何と芳しいことでしょう。

小倉倭子

着ぶくれて昔話を飽きもせず
祝盃の酒も御法度寒の水

日向ぼこの縁は賑やか。何回も同じ昔話に花を咲かせてい
るのでしょう。それを見ている作者の眼が暖かいのです。健
康上の理由で祝盃すら禁じられている無念、分ります。

逃げ水を追ひかけ一途女坂
初松魚紀州の婿に江戸の嫁

決断の緩むひと口ところてん

生粋の江戸っ子である作者。何事に対してもひたすら思い定める。そして、熊野詣でも知られる紀伊国出身のご主人との相性も抜群。三句目、喉ごしつるりとところ天。固い事など言わず「まあ良しとするか」そんな気分でしょうか。

松井由紀子

熱の子へ葛湯まあるく溶きやりぬ
あぢけなやひと日限りの春の雪
春の月踏むには淡き影法師

熱の子への優しい心使いが、まあるく溶くで充分に伝わります。三句目、冷涼な秋の月とは違い春の朧の月の暖か味も良いものです。淡き影法師に作者の心の在り処を感じます。

相傘のしばし佇む濃紫陽花
隻眼となりてなほ澄む今日の月

八月号月欄の巻頭句。濃紫陽花を前に傘の内なる二人。何やら秘密めくものがありそうな。二句目、隻眼とは一つの眼又は真実を見抜く眼とある。今日の月の澄んだ美しさを余すところなく詠んでいます。

井上玲子

しんしんと身を抜く寒さ雪催
米寿まで生きて春着の裾捌き

「身を抜く寒さ」とは、これ以上の寒さはないと感じた言いで得て妙の措辞に感じ入った。たおやかな感じの作者、裾捌きも軽やかにさぞや春着もお似合いのことでしょう。

渓谷をまたぐ吊橋 風薫る
行き暮れて祇王寺訪ふや竹の秋
灯が洩れて一日の暮色 秋簾

渓谷、吊橋でもしや祖谷の蔓橋ではと…。私が渡った時は生憎の雨、作者は風薫る良い日であったのですね。平家物語ゆかりの祇王寺。ロマン溢れる物語が心を過ります。

野田静香

帯解や簪 ゆらす杜の風
菜を刻むリズム佳き日や紋黄蝶

古くは九歳の一月に行う子どもに初めて幅広の帯を用いて祝う行事。神社にお参りした時の雅な雰囲気を感じられます。二句目、成虫のまま越冬して春真っ先に見られると言う紋黄蝶、幸先よき心弾む一日になりそうですね。

相席の旅人と見る二重虹
秋めくや余白の多き水彩画
山門の龍を遊ばせ松手入

思いの他余白の部分が多い絵画。余白にこそその絵の本意を感じた詩情。三句目、山門に龍とは由緒ある寺院でしょう。今年の干支の龍、「遊ばせ」に俳諧味があります。

櫻梅桃李

大橋廸代

椎野美代子

文化の日電子辞書より虚子の声
孔雀全開求愛の春白昼
シャガールの馬が空とぶ薔薇アーチ
八月や殊に饑き臍も腑も

私の辞書は時代遅れで虚子の声は聞けずパソコンで検索、
ご自身の披講は一本調子で淡淡としておりいささか拍子抜け、
孔雀が全開の羽を震わせ風を起こすかに求愛の声を上げる
場面に遭遇。助詞の「の」の字以外すべて漢字の仕立ては足
がすくむ感にびたり。古来どれだけ多くの男性が女性にバラ
を捧げたるうか、上五・中七を額縁と見立てブルーの馬が空
を飛ぶ愛の絵だ。饑の一字で代用食時代を一瞬に彷彿。八月
は後悔と祈りの月だが猛暑にはさすがにこたえた。

五明昇

海鳴りを遠音に加賀の蕪鮓
草餅搗く相老いの息びつたりと
古戦場に魂の数ほど夕蛩

レガッタの櫂のようそろ雲の峰

薄く輪切にした蕪に塩鮓をはさみ麴で漬けた蕪鮓に今宵の
酒は菊姫か、海鳴りもやがて子守唄に。相老いの息びつたり
に労りと望郷の念ひとしお。焼けば餡の焦げる匂いがたまら
ない。太田城水攻めの来迎寺と堤防の遺構は筆者の家からさ
ほど遠くない。戦で消えた魂の乱舞と思えば万感胸に迫る夕
螢。学らんの反り身の声援に赤銅色の腕の櫂さばきには一段
と力がはいる。ようそろうの掛け声にラストスパートの櫂し
ぶきは雲の峰まで届かんばかりの青春真つ只中。

菊池ひろこ

梅林へ御高祖頭布が先立ちて
万愚節コロナ乗りぬし豪華船
飛魚の軌跡見てゐる数学者
ひらがなの眼で娘らを追ふ案山子

もしやふところに懐剣がと思わせる紫の御高祖頭布。香り
高い梅林での撮影かと想像がふくらむ。三年前の横浜港の
七百十二人が感染、十三人が死亡の悪夢が甦る。今年千五百
人が下船、観光を楽しんだがコロナの不安は払拭できない。
強大な胸鱗をひろげ、尾鱗尻鱗を使って海面をけつて滑空
するとか、目をみはる数学者との取合せが絶妙。ひらがなの

眼を察するだけで楽しくなってくる。この案山子男か？ 一張羅を着ても誰も振りむかぬ。ああ退屈だなあ。

高島寛治

太箸や昭和の家族陣の座に
水漏れは分からず仕舞春の風邪
白牡丹五重塔を遠巻きに
晚酌は五時と決めたる生身魂

陣の座で雑煮を祝う高島家と同じく筆者も七人家族各高膳を前に正座、父の新年の言葉をまつ昭和のよき元朝の風習。

誰も見舞ってくれないのが風邪と腰痛とか、水漏れの原因不明と春の風邪に成程と納得させられる。大景を詠んで句柄大きく、七月の巻頭を飾った格調高き秀句。八月十三日から十五日迄は盆祭に忙しい家族にとって、五時の晚酌の肴づくりは大変だ。そんなことには頓着なし、悠悠自適の生身魂さまの飄飄ぶりが愛される所以だ。

町野広子

綿虫や打ち明けぬまま終へし恋
ポンポン付けて毛糸帽編み終る
夏の雨手心といふ謀
薔薇園に着て行くならば白か黒

空中を漂う綿虫を掌にのせると透明な水色の翅をぴんと立て夢占のよう。少しの勇気を出せなかった後悔に今も胸がきゅんとなる。米寿のお姉様の帽子を編み御主人の散髪もなされた主婦の鑑の広子さん。手心といふ謀の措辞は作者の独壇場だ。色彩ゆたかなバラ園へゆく衣服は白か黒と断定する潔さが小気味よく、作句の巧みさにも通じる。
九月号の「梅雨晴や弓手に残る指輪跡」は華の一句に輝いた。しみじみと心に響く。

渋谷きいち

照り返す寺の反り屋根新樹光
青芝に寝て地球に抱かれたる気分
策のまま手造り母の新豆腐
天高し召さるる母の手に折鶴

まぶしい新樹とおごそかな古刹の反り屋根の対比に生命感あふれる初夏の息吹を感じる。本州最南端の潮岬の望楼の芝を思い描く。穏やかな弧を描いて太平洋が広がりに地球の丸さを実感、地球に抱かれる気分共鳴。生国の新大豆でお母様手造りの豆腐はほんのり暖かくて慈愛に満ちた新秋の味である。秋空の高く澄みきった日に天に召されたお母様は、大正から令和迄激動の時代を強く生き百四歳の天寿を全うされた人生の達人。御冥福をお祈りします。

六花

菊池ひろこ

網野月を

翼の中へ何か隠して冬の鳥
二声三声続きて影や寒鴉
たぶん猫犬ではないな春の泥

寒さしのぎに羽をふくらませた冬鳥を、何かを隠したと見る目がやさしい。二声三声に続きその影にも音が感じられる。春の泥。猫の足跡ならば分かるけれど、という猫派の句と拝察。

春陽やフリーサイズの赤パンツ
夏のマストは白でありぬべし

「おばあちゃんの原宿」としても知られる界限ではあるが、下着ならぬ、若者の長ズボンなのだろう。「春陽や」に、それがまかり通る昨今への思いを感じる。青い海を遠く征く船のマストは白であるに違いない。五七の現代語感から、強意の「ぬ」を含む下五の文語体への移行にユーモアを感じる。

石井喜恵

冬の霧交互に揺るる舫ひ船

初明り衛兵の立つ二重橋

冬霧に遮られ同時には見えない舫ひ船。「交互に揺るる」との表現に感服。新年参賀であろう。身をさす寒さを感じさせる。

雁風呂や崩すに惜しき砂の城
若鮎の気負ひの眼放流す
麦秋の雨を誘ふか泣き羅漢

浜辺の木切れにも人が作った砂の城にも懸命さを見ている。放流される若鮎のその眼に気負いを見た姿勢に敬服。喜多院の五百羅漢の一つ泣き羅漢。麦秋の雨を誘うとの発想がすばらしい。

石山かつ子

草もみぢ客土の土を山積み
蜥蜴出てしばらく宙を見てゐたる

他から運び入れられた客土。それを尻目に、元からの草はもみじ色を見せている。蜥蜴を捉えた伝統的手法が生きた佳句。

逃げ水を越え逃げ水や母見舞ふ
蚊遣豚睦言聴いてゐたりけり
夏の海見渡す丘に林火句碑

入院中のお母様への気持を逃げ水で表してある秀句。縁側の蚊遣豚を使い人間生活を詠んである。大野林火の句「白き

巨船きたれり春も遠からず」を思い、丘に立つ作者であろうか。

梅澤佐江

神々の恋はおほらか里神楽
夏がすみ魁夷の白馬現るや
繋ぎあふ手のうたかたや蛭狩

里神楽なるものを神々の恋のおほらかさで表現した佳句。「夏がすみ」の感触から、東山魁夷の緑の中の白馬をイメージしている。繋ぎあふ手のはかなさが蛍の光で暗示されている。

捨案山子の如く膝に抱けり捨案山子
実葛牛車の停まりさうな宵

捨案山子を片付ける姿に、イエスを抱く聖母マリアを見た感情移入のある句。実葛の「実」は「小寝」との掛詞。詠まれた恋の歌の時代から「牛車」という発想が生まれている。

松宮保人

新館に木の香りして秋時雨
断崖の上とも知らず野水仙
引き返し中にはありや蟻の列

秋時雨に、ふと新館の木の香を感じる感覚は鋭い。二句目・三句目の「軽み」を推し進めると、「諧謔味」になるで

あろう。

娘三人厨房に立つ二日かな
緩らかや湖北に浮かぶ花見舟

正月二日にはお嬢様方がお母様が替わり厨房に。「幸せ」を切り取った句。「緩らか」は枕草子や源氏物語にも見る古語で「ゆるやか」の語意があるが、のどかな気候をも感じられた。琵琶湖の北の部分をやく花見舟に最適な詞であらう。

曲淵徹雄

梵鐘と撞木の間合秋の風
墨堤に荷風の背中空つ風
麦の芽に遊ばせてみる指の影

梵鐘と撞木の間合に秋の風を感じている句。永井荷風の「溼東綺譚」の頃とは様変わりした墨田川沿い。空つ風が現代とつなげる。麦の芽が人の指大の頃。畠仕事の合間の句であらうか。

潮の香につとひき返す赤蜻蛉
啓蟄の水平線を出る陽かな

ふと引き返す赤蜻蛉。「潮の香に」の思い付きが秀逸である。啓蟄と言えば蛙などが出てくる地中・地表を思うが、「陽が出る」のであり、したがって「水平線」との発想に瞠目した。

随所作主

五明 昇

田寺玲子

魚板打つ音新涼の建仁寺
奥嵯峨の秘仏をろがむ片時雨
日脚伸ぶ源氏香聞く紫野

折節の京洛の風情を雅やかに詠んだ三句。京五山の一つ建仁寺から洩れる魚板の音は、爽やかに秋の到来を感じさせる。静かな時雨の奥嵯峨路、訪ね当てた秘仏への祈りのひと時はいかにも尊い。春近き紫野・大徳寺の塔頭で、古典文学を主題に香りを楽しむ「源氏香」との出会いに陶然とする。

青き踏む明石原人出でし丘
息白く海明けはじむ糶の声

作者の住む明石市は、日本最古の原人かとの論争が行われた「明石原人」の発見地。魚の棚（うおんだな）商店街に近い明石浦漁港からは威勢良く活魚の糶声が聞こえてくる。

十倉和子

蝌蚪生る脱ぎ散らしたる子等の靴
散る木の葉ひとつふたつは鳥になり

雪吊りは園の豎琴奏でたく

視点の新鮮さと取り合わせの妙が光る三句を抽出した。一句目、蝌蚪の群れと玄関に脱ぎ散らかした子供たちの靴との対比は見事。二句目、風に煽られて一斉に舞い散る木の葉、その一枚二枚は鳥になるのではとのメルヘンに酔う。三句目、そう言えば公園の雪吊りの姿は豎琴に似ていますね。

草笛を吹きくれしひと征つたきり
語り部となる女生徒に八月来

幼き日、草笛を吹いてくれた彼の人は戦争に行つたきり戻らない。語り部となる女生徒に、原爆忌や終戦記念日が続く責任の重い八月が来る。戦争許すまじの痛恨の二句だ。

鳥羽和風

播鉢を飯で洗ふや木の芽和
青田波一両電車の走りつぶり
ちやんちやんこ肘で刺し込む畳針

木の芽和えを作つた後の播鉢に炊き立ての飯を加えた混ぜご飯は絶品だろう。一両電車も一面の青田波の中を走ればその軽快ぶりに心が躍る。袖なしの綿入れを着た匠が、肘で糸を締めながら今では貴重品の手縫いの畳を仕上げている。いずれも視座の確かさと措辞の巧みさが生んだ佳句である。

我先に世間見たがる土筆かな
口割れば余罪もぼろり石榴かな

野原によきによきと顔を出す土筆を「世間見たがる」と

はよくぞ言ったり。真つ赤に割れる石榴の口からは余罪がぼろり。思わず膝を打つ俳諧味に富んだ作品である。

永野史代

喧嘩しても二人仲直りしても二人狸汗
耳聴く夫の靴音聞く霜夜
夫よあなたへ生涯一度の毛糸編む

しみじみとした夫婦愛に溢れる三句を掲出した。喜怒哀楽を分け合つて生きる二人に、蒟蒻と野菜を炒め煮した代用の狸汁は何んと美味な事か。何よりの安らぎは霜夜を帰り来る夫の靴音。生涯一度の夫のための編み物は来し方行く末、万感の想いが交錯してなかなか仕上がらない。

火のやうに鳴くヒロシマの熊蟬は
十二月八日返事の来ない手紙書く

炎暑の八月が来ると、火がついたように鳴きしきる熊蟬。開戦記念日、戻らぬ人に書く空しい便り。二度と繰り返してはならない戦争の悲劇に、身を正される二句だ。

大塚茂子

万緑や老いて身内に燃ゆるもの
木の芽張る名もなき山の身つくろひ
台風を凌ぎ切つたるコスモス野

むせかえる万緑の中に老後の初心を確かめるひと時。名も無い雑木山が、木の芽を一杯に張って春に向かつて身繕いをする健気さ。荒川沿いに広がる一千万本のコスモスが台風を

凌いで咲き誇る美しくも強靱な姿。自然の何気ない営みに確かな意志を感じ取って、勇気づけられる作者がいる。

機町に機音消えて法師蟬
稲架組みて変らぬ位置に武甲山

全盛期に五、六百軒もあった秩父銘仙の織物工場は、今は一軒を残すのみ。武甲山の位置は変わらないが、作者の故郷である古き良き秩父は、次第にその面影を失いつつある。

日高道を

板長の手際の良さも夏料理
風呂敷に清酒一本盆見舞
藁を編む姫の背中山眠る

眼前の情景を巧みな措辞で鮮やかな一景に仕立て上げる技量に感服する。磨き上げた板場で板長が捌く料理の数々、その手際の良さが夏料理を引き立てる。新盆の見舞いに携える一本の銘酒は故人への心尽し。初冬の薄日を浴びて藁を編む姫の背中に、懐かしい昭和の面影が宿っている。

街に出よ浮かれ猫にも俳諧味
母の日はいつか妻の日二人旅

一句目は着想が新鮮で、まさに俳諧味に溢れた秀句である。子育てを終え、母の日もいつしか妻の日へと姿を変える頃から、旅の相棒としての夫の役割も重要となつて来る。

桜花爛漫

境 延昭

波多野寿子

初弾きや唄しんしんと部屋に満つ
かるやかに琴の伴奏秋うらら
琴並び摺り足で入る冬座敷

琴を詠むに作者を置いて右に出る者を知らない。単に句材にすると云うより日々の生活が琴と共にあるように読む。しかも一人で嗜むのではなく多くのお弟子さんを抱えられるのである。冬座敷の措辞からは指導に入る前の緊張感が漲る。

麦秋や指切りと言ふ淋しきもの
日暮れてもあくまで白き蕎麦の花

指切りの触感は長く残る。その記憶はあっても約束自体はたわい無いもの、忘れても咎められることはない。蕎麦の花、写生であって深い。平易な詠みに俳句表現の可能性を知る。

星野和葉

せめて眼をつむらせたきや雛納

青とかけ再生の尾の寸足らず
指一本でピアノ一音秋わびし

作者は一昨年初句集「永字八法」を上梓した。作者の句の魅力は初心の頃の初々しさを保持する鮮度にある。眼前にあるものをストレートに表現しそれが定型に収まる。俳句の醍醐味である。

縁側の欲しリビングの月見酒
四半分を冬至南瓜の名で売らる

二階のベランダでは寒くて月見酒とはいかぬ。リビングの窓からは廂や隣の屋根が邪魔になる。月見は座敷の南側に広縁があつてこそそのもの。南瓜は秋の果菜、保存の効くため冬の栄養不足に備えるため冬至に食した。さりげなく昔を偲ぶ気分が共感する。

森本早苗

日脚伸ぶ鳩の微睡む天守閣
朝桜いま飛びたたむ白鷺城
最終便の尾灯見送る星月夜

上向き目の線の詠みが良い。前の二句は地元姫路城での詠。国宝で世界文化遺産、五層六階の天守と三つの小天守があり白鷺城の名で親しまれる。特に朝桜の句、名城を自慢する気分が伝わる。

月朧「チエミ」のさのさ口遊ぶ
春の宵蕈焼き鯉と「土佐鶴」と

「チエミ」は戦後間もない頃三人娘の一人として鳴らした江利チエミ、タキシードにシルクハットのテネシーワルツが懐かしい。昔全国大会で披露した芸達者な作者、そのさのさが聞きたい。「土佐鶴」は「司牡丹」に並ぶ土佐の銘酒、鯉のたたきには常温が合う。

井上燈女

袈裟がけに来る夕立の早さかな
立秋や豆腐の布目水に透く
母の物着こなす姉妹菊日和
後手に結ぶお太鼓菊日和

切字を使った二句、細やかな写生が効く。菊日和の句を二句引く。いずれも母恋の句と読む。母上が大事にした大島であらうか、妹たちがベストやコートに仕立て直している。それがよく似合っている。日常が和服であった頃、急ぎの用で出かける母は奥で着替えるや座敷を横切りながら後手で帯を結んだ。菊日和に託したのは在りし日の母御への追憶である。

池田雅夫

三ヶ日一升瓶の添ひ寝とは
如雨露から五色の光水温む

数へても数へても数合はぬ蝌蚪
うつすらと風のかたち秋の雲

人は生涯いろんな酒を経験するものだが、細身でスマートな作者の風貌からは一升瓶との添ひ寝は似合わない。左党には羨ましい景かも知れぬが句尾「とは」に自戒の念がこもる。仕事は胃袋に任せた昭和のサラリーマンはいざ知らず、自営の作者はほどほどに。

「数」の字を三つ重ねた蝌蚪の詠み、風の形だと読む秋の雲に共感し納得する。

近藤徹平

ナポレオン空つぽにする年始客
平積みの帯の寸評書肆の春
「銀恋」の発車メロデー梅雨あがる
鼻の差の写真判定天高し

博識で知識欲旺盛な作者、句の対象は全方位である。ナポレオンはコニヤック地方の高級のブランド、年始客に呑まれるのは未だしもコルクの上の封のパラフィンが乾き蒸発することもあるのでご用心。

「銀恋」は裕次郎の「銀座の恋の物語り」のこと。句座での作者の説明によると地下鉄日比谷線の銀座駅の発車メロデーの由。昔デュエットの十八番だった。鼻の差を競うのは競馬、季語から察するに四歳馬以上が二千Mを競う秋の天皇賞に違いない。

一陽来復

島津初花

西山貴美子

彼岸会や秘色の法衣風はらみ
彼岸会の目蓋されば曼陀羅華
その下に氏子集ひぬ藤の花

太陽の光のどかな春の彼岸のお参りの三句。秘色とは、中国で天子だけが許された色で、淡い浅葱色は彼岸の日に最もふさわしい色であったと思われまます。

声が整うお経は曼陀羅華。続いてお参りの列に加わる。氏子の列は藤棚の下へと伸びている。

矛先の些か外れて春の風
水温む曙杉の影ふえて

曙杉は「メタセコイア」の和名で淡紅に黄味を帯びた色とある。季節の風を敏感にとらえ、風と共に春を惜しまれて居られる。

矢作水尾

大漁旗船旗昂ぶる初明り
風花やみんなよき名の舳ひ船
早春の新造船の槌の音
風が生み風が育つる波の花
門の真一文字に雪解風

華華しい早春の船出の光景に引き込まれた。船出を待つ船の名はみんな良き名とは少し気になる。

乾いた槌の音は風に乗る漁港に響いている。陸へ吹き上がると雪解の風となるのでしよう。早春の海辺の景を清しく詠まれていて感銘しました。

山中みどり

口ずさむサン・トワ・マミー春の星
海馬消滅それも幸とや白木蓮
良きことも悪しきも忘れ桃の花

ご夫婦の日常の一コマを爽やかに詠まれて感服している。誰にも来る老いをユーモアに変えて句にされていたり、日常生活の中でサン・トワ・マミーとは驚きと尊敬の他無い。

つなぐ掌の薄きが哀し初桜

ふたり居るこの温もりや春の月

つなぐ手に力が弱くなって来たと感じた時の心情が一段と身に詰まるところである。また季節が変わり、花見に出掛けるお二人の時間が長く続きます様に。

大場順子

すべり台一直線に下りて春
かがやける早瀬の弾く上り鮎
良き文の届き本復春の風邪
春塵のごと家移りの荷をほどきけり
大声の訝を返し山笑ふ

一気に春に変わった。その早さは子供達がすべり台をすべり下りる早さとダブらせている。輝く上り鮎。心配していたが身内の風邪も治まった様だ。住所を移転されたのでしょうか。塵ごと荷をほどくから、長い年月の思い出の荷物の品なればこそです。また新しい塵に変わっていくのでしょうか。新天地ですこやかにお暮し下さい。

保坂翔太

パンの耳揚げたる御八つ建国日
道真の念ひを今に梅見かな
残る雪棚田に灰を撒く老爺
山笑ふ沢音高き分水嶺

節分が終ると建国日。梅の蕾も膨らんでくる。道真公に祈願に訪れる人も、梅見客も増える。野に下りて見ると棚田に雪が深い。一老爺が灰を撒いて居られる。我が北陸の父が灰を撒いていたのを思い出す。分水嶺で分れた水は、勢い良く雪解の水となって川を下り野を潤す。大白鳥が我が物顔で。

檜鼻ことは

つまみ食ひ楽しむ母の十二月
母の日や母の箆筒の母子手帳
葛餅やひとつおくれと母の言ひ
父の声母の声聞く蛍の夜

年の瀬は正月を前に煮物、漬け物と主婦は忙しい。そこで、母は味見役であり相談役なのである。母の桐箆筒の小抽斗に母子手帳があった。母は未だ居る。身長、体重、血液型など時の経つのも忘れていた。「欲しいものを何でも言つて」と言っても帰らない日々。蛍がさかんに窓辺に寄る夜は、父の声、母の声を聞いている。

感動

松宮保人

境 延昭

新蕎麦やなべて蕎麦屋は無愛想
然りげ無き少女の会釈春隣
テラスから埋まる五月の喫茶店

蕎麦の通であり、蕎麦のことなら知り尽しているのだ。一見、お客に対して愛想が良くないので腹立たしく思っているようにも思えるのだが、そんなことはどうでもよい。まして老舗であれば味が勝負だと言っているように思える。因みに、私は辛み大根おろしそばが大好きだ。

守宮鳴く窓に化石のやうな貌
母の居ぬ故郷とほし蕎麦の花

・やもりは鳴かないのかと思っていたが、鳴くものもいるのだそう。夏の夜にガラスの窓越しにピタリとくつついて微動だにしない、全く表情のない不気味な姿に出交すことがある。化石のような貌とは、本当に的を射た表現である。だが、朝になれば何処かへ消え失せてしまっている。

鈴木康世

恙がなく生きて卒寿の屠蘇祝ふ
雨あがり土手の土筆の総立ちに

人は、長い人生の間に、喜怒哀楽さまざまな経験をして今日がある。「恙がなく」と言う言葉は、そんな経験を積んできたからこそ今、息災であることの喜びを感じるのである。先ずは、卒寿の御祝を申し上げるとともにこれからの人生を一年一年御身大切に御過しの程を……。

春眠やとり逃したる夢一つ
書に飽きて見上ぐる向かう大夕焼
秋草に坐し口吟を繰り返す

「春眠暁を覚えず」で始まる中国盛唐の詩人孟浩然の漢詩の一節を思い出した。春の夜は寝心地がいいので夜が明けたことに気付かずつい寝過ぎてしまう。又、寝ざめ前の夢は覚えていようであるが、深眠りの後では、何んだか良い夢を見たようだが確と覚えていない。損をしたような気持になり何んとなく虚しくなる。

島津初花

春光や耕耘の土湯気放つ
葛餅の餡透きとほる「雲城水」
緑陰や一氣に落とすラムネ玉

畑の土は雪解けてうらかな春の日ざしを受けながら耕耘機で耕されてゆく農地の情景を湯気立ち上るといふ表現でなく「湯気放つ」と詠んでいるところに、春の農地の活気を感じさせてくれる。流石、専業農家の主婦ならではの詠み。今年も立派な農作物が収穫できたことであろう。

蜘蛛の巣に掛かりし朝の野菜畑
秋深し断捨離の身のほぐれゆく

夏の朝涼しいうちと思ひ、畑の手入れ又は収穫に行くと、

一夜のうちに作ったのであろうか、蜘蛛の巣に掛かってしま
うことがある。顔にでも掛かったりすると大変わずらわしく
腹立たしいものである。だが蜘蛛であっても生きものの、網を
張って作物の害虫を退治し餌にしているのかも知れない。生
物の共生だと思えば納得できる。

正木萬蝶

根深汁はにわの貌の夫とあて
非常口のピクトグラムや春の闇

ねぎとあげの味噌汁のことを根深汁と言う。よく調べてみ
ると、葱の成分は解熱、発汗を促すので風邪の多い季節に好
まれる。「はにわの貌の夫」とは、風邪を引いて元気がなく、
顔の表情が失せてしまった夫のために、妻が根深汁を食べさ
せたのではと推測する。仲睦まじい二人の生活が窺える。

灯台の死角に卯波胸騒ぎ
梅雨夕焼常世の国を垣間見る
産土の神を引き連れ秋起し

「灯台下暗し」の諺は「人は身近なことには案外気が付か
ない」ことを言っているのだが、「灯台の死角」と同じ様な
意味ではあるが、作者は、夜ではなく昼間のことなので、そ
の卯波という異変に気付いているのである。この後どのよう
な事態が起るのであろうか。心中穏やかではない。

青木鶴城

山眠るひととせ包み込む如く
繚乱を見据へ庭師の寒の内

解け出しの音に誘はれ山董

山眠ると言う現象は常緑樹ばかりの山ではなく、むしろ落
葉樹が大半の雑木山をイメージする。春の芽吹きから夏の瑞
瑞しさ、秋の彩りそして冬へと一年分の自然現象と人間の生
活の事実までも包み込んでしまいい、腹いっぱい状態の眠っ
ているように思えるものだ。

二人居の風と思へば団扇かな
入江へと続く棚田や一人秋

蒸し暑い夜、家に居た堪れなくなり、公園で夕涼みと言
うことになり浴衣掛けで出掛けたが、此処もあまり涼しくな
いなど思っていると、すつと救われるような風が吹いてきた。
それは妻が予め用意して持って来た団扇の風であったのだ。

横山君夫

朝もぎの無花果星の匂ひかな
屏風絵の龍昇り立つ大旦
学帽は少し大きめ山笑ふ

成長盛りの男子中学生又は高校生であろう。進学に際し、
校章入りの学帽を新調した。だが少し大きいのか何だか不自
然に見える。少し滑稽で且つ微笑ましい情景であり、季語
「山笑ふ」によく調和している。

生前葬終へていきいき生身魂
阿波踊腰の印籠をどらせて

阿波踊りは、江戸時代から四〇〇年続く徳島の盆踊り。踊
り手が笠を被ったり頬被りするのには盆に迎えた先祖の神霊の
姿であると言われている。腰の印籠が踊る情景には男踊りの
臨場感があふれている。

竜天に

星野和葉

茂木和子

籠もり癖一気に放つ春の野に
吹雪かと紛ふ柳絮に遊びけり

コロナ禍の三年間でついた籠もり癖、一気に放たれたとは何よりである。柳絮の中を跳び廻る子らの姿に安堵する。

ダリア切るあとの空白手の火照り
落日を見てゐてダリア見失ふ
炎帝に唸りを囓ます掘削機

考えぬいた末に真っ赤なダリアを切った。これで良かったのか、指先がじんとする。残したダリアは落日の中に溶け込んだようだ。夏の神「炎帝」に唸りを囓ましたという発想が面白い。それでどうした？ 涼しくなるわけではない。

柚木治子

佐保姫かも無名のメモの女文字

佐保姫の神祕のオーラ放ち立つ

ポストに花の絵とメモ、名は無いが綺麗な女文字だ。佐保姫の仕業かも。書かれていたのは達筆で、はるよこいぐと。

道草の愉悦おぼゆる蟻地獄
砂漠行くキャラバンに似し蟻の列
染分けの謎のすずやか片白草

落ちて行く虫を可愛想と思いつながら目の離せない蟻地獄。この蟻の列の始めと終りは何処なのか、刻の経つのを忘れる。道草は甘く見よう。片白草（半夏生草）の緑と白の染め分けは、毎年見ても自然の謎に畏れいる。

由良ゆら女

七五三母さん何んだかいいにほひ
切り干しを作り置きして南座へ

一寸お洒落をした七五三のお祝い「いにほひ」と言われたら満更でもない。そして今日は母さんが楽しむ番、思い切りお洒落をして、飛び切り綺麗になって……。

一声は鳥か土手ゆく草笛か
秘密基地戦の合図草の笛
草笛や陰画となりて下校の子

草笛は草や木の葉を唇に押しあてて吹き鳴らす。メロディ
―等吹く事も出来るが、鳥の真似や戦ごつこの合図に。うま
く吹ける子は一目おかれる。下校時は先頭になれる。

丸山マシミ

円窓の切り取る庭やさみだるる
自若たる楠の風格梅雨夕焼

円窓から見える庭。窓が「切り取る」という措辞に納得。
高さ20メートルにもなる常緑の楠、でんと構える姿を適切な
言葉で一句に。「自若」が利いている。樟脳の木とも。

山よりの風も過客の夏館
夏の霧馬の背越えを行く歩荷
汽笛の尾沖に揺るるや夏の霧

別荘だろうか、山よりの涼しい風は待ち望んだお客だ。夏
の霧で二句、山と海でそれぞれ情景が見えて楽しい。「歩
荷」など久し振りだ。語彙の豊富な作者である。

河野はるみ

月淡く残る岬の野水仙
水仙や夫婦は別の恋ごころ
朝寝して非常ベルなる腹時計

淡い月の光に咲く野水仙。越前岬それとも伊豆の爪木崎で
あるうか。景にうっとりしていたら二句目にびっくり。だが
水仙の花言葉「うぬぼれ、自己愛」に何となく分かる気がす
る。三句目の作者は健康そのもので安心。

笹舟の小石でくるり秋の川
お伽噺幾つも浮かぶ秋の川

懐かしい笹舟、どこまでもと祈ったものだ。川の出でくる
お伽噺数えてみた。一寸法師、桃太郎、意外と見付からない。

染谷風子

妙齢に席を譲られ初電車
トランプの独り占ひ春の雲
アレグロの落葉時雨よ奏楽堂

正月早々若い女性に席を譲られる。悪い気はしない。早速
トランプで占うと今年が良い年になりそうだ。葉の落ちる速
さと音、この音を時雨に喩えた落葉時雨。美しい言葉である。

初茄子や糟糠の妻髪染むる
初更には閉まる玄関穴惑

永年連れ添われた奥様が髪を染めてこられた。「若くなっ
たね」とひと言、茄子も見事な色に。「初更」とは今のおよ
そ七時〜九時に当たる。門限だろうか。「穴惑」が面白い。

俳誌望見 染谷風子

「鳥羽谷」

主 宰 二〇二三年老蝶編 通巻二〇七号
 発行所 榎鼻ことは
 福井県三方上中郡若狭町

昭和二四年五月、澤本知水、山本嵯迷他、鳥羽谷の俳友により月刊誌として創刊。その後、昭和二五年五月号をもって休刊。昭和四八年十月、鳥津城子によって十号より復刊。平成二一年四月の一四九号まで鳥津城子が主宰を務め、その後宇田白鷺が継承し、令和四年四月の二〇一号より、榎鼻ことはが主宰を務める。季刊。「鳥羽谷」は若狭水明俳句会の俳誌で、表紙と題字は長谷川かな女の筆による。

巻頭の主宰詠「ぶつきらぼう」十句は何れも若狭の風土を愛する作者の穏やかな眼が捉えた秀句である。うち、作者の人間臭を感じさせる三句を抽出。

店の名は「ぶつきらぼう」ぞ処暑の酒
 啄木鳥や場末のバーの指定席
 自販機の釣りを取り出す夜寒かな
 運営同人の自選句、「東雲集」八〇句より共鳴句を八句。
 青柿やトタンの屋根に音残し 島津 初花
 川柳に笑ひをもらふ良夜かな 鳥羽 和風
 胸中は熱き思ひやサングラス 松宮 保人
 金文字の般若波羅蜜多秋扇 宇田 白鷺
 板張りの廊下に猫と三尺寝 原田 自然

青柿や残し置くもの捨つる物 山崎 郁子
 里人と地蔵も見上げる遠花火 松島 寛久
 青柿や青い山脈口遊む 飛永 鼓
 一句目、静寂を破る青柿の落下音とその残響の描写が鮮やか。二句目、同じ五・七・五の文芸である俳句と川柳は限りなく接近しているのは事実である。三句目、サングラスの奥に隠れる男のロマン。四句目、若狭は仏の多い国である。金泥で書かれた般若心経と秋扇の取合せは作者の心の深淵を覗かせる。五句目、猫との三尺寝は諧謔。六句目、終活の景か。

青柿とのコントラストが鮮やか。七句目、里人に慕われるお地蔵はもはや村の一員だ。八句目、『青い山脈』は石坂洋次郎の小説で、昭和二四年今井正監督で映画化され、その主題歌は大ヒットした。青柿と高校生の恋愛との取合せは心憎い。「鳥羽谷同人集」各五句二二名一〇五句より共鳴句五句。

秋時雨LP盤に針下し 宇田 春木
 送り火の真つ直ぐ夜空へと還る 榎鼻澄美江
 子規さんの糸瓜ぶらりと縁先に 原田 洋美
 白鷺やつかず離れず田の中に 松宮 妙子
 母逝きて見よう見まねの盆支度 松村登美江
 紹介したい句は未だ多数あるが紙幅の都合上割愛したい。本号には、鳥津初花氏の「『かな女賞』を受賞して」の一文も掲載されている。若狭水明俳句会の発展を祈念致します。

句集喝采

曲淵徹雄

◆江島 照美「恋教鳥」

文學の森

著者略歴 昭和二十八年熊本市生。平成十五年「雲の峰」入会。平成二十年「槐」入会。平成二十一年「槐」同人。平成二十九年槐賞。令和元年句集『発火点』。令和三年文學の森賞。関西現代俳句協会理事・現代俳句協会会員。

著者の第一句集。『発火点』上梓後、四年余りの三五九句を収載。母への鎮魂の特別作品を含む。句集名は、「恋教鳥知らぬ前には戻られぬ」より。

父と母バイク出勤風光る
小春日や老いは二人を近づける
母の日や父から妣の名で呼ばれ
長き夜の針持つ父の手先かな
以上四句、父母への思いを詠った句から。

しなだるる桜の枝に子供服
しがみつくなふんぼんと放り出す
赤とんぼ赤に寂しさありにけり
裸木が全身に陽を浴びてをる

以上四句、写生を基本に簡潔に描き、余情のある句。

「青大将からまる幹の喘ぎかな」、「火の国は水の国なり風光る」、「この林檎魔法か毒かかじつてよ」、「矩を躰え生き生さするよへくそ葛」。第一句、感性の句。第二句、故郷熊本。第三句、第四句、読み手に呼びかけるように詠う句。コロナ禍をやり過ごし、父母を見送られた著者のこれから新たな境地での句が待たれる。

◆梶間 淳子「複眼の宇宙」

文學の森

著者略歴 昭和三十年奈良市生。平成八年「好日」入会。平成十一年青雲賞。平成十五年句集『青信号』。平成二十二年好日賞。

著者の第二句集。句集『青信号』から後の二十年の三〇二句を収載。句集名は「複眼の宇宙に遊ぶ鬼やんま」より。自由に楽しんで伸び伸びと句が詠まれている。

ふるさととは靴ぬぐところ海雲汁
逃水や旧姓といふ落し物
ピリオドのごとく線香花火落つ
実紫ほどのこだはり持ち続け
雪の朝生まれ一生水瓶座

以上五句、著者の感性と視線の鋭さを思う。

八卦見の後ろたつぶり木下闇
べしやんこになつてもわたし紙風船
恵那山の近くて遠し吊し柿
木曾馬の鼻の湿りや小六月
おでん屋に円き顔もて集まれり

第一句、第二句は俳味のある句。第三句、第四句は在住の地域を詠んだ句。第五句は、酒に目がない筆者の好きな句。

一人来て二人となりぬ螢狩
初雪と君に伝へてより無口
感性の若々しい著者は、これからも羽を広げて俳句の世界を飛翔されることであろう。

山本鬼之介 選

水明集

刻むほど銀杏散るらむメトロノーム
まだ読まぬドックの結果モンブラン
肌寒や金沢過る二つ川
遠ければ真白に見ゆるゆりかもめ
張りぼてに一種の気魄恵比須講

さいたま 元田亮一

高層のビルは墓標ぞ冬夕焼
凧に帽子攫はれ凧のごと
子の思ひ親の思ひや隙間風
青天や朱あり黄ありの冬もみぢ
黄落や古刹の庭の六地藏

反町 修

碧天に稜線つづき神送り
こぼれたる山茶花咲かす路面かな
仇討のごと荒れ畑の牛膝
叱られ子に綿虫の飛ぶ田圃道
吊橋の底は奈落かそぞろ寒

さいたま 西幅公子

立冬や湯舟で伸ばすふくらはぎ
窓越しに茜の空や冬に入る
清張の完全犯罪冬の雷
大標繩に縁を託すや神の旅
大股で避けて通るや朴落葉

新 曆文

短日の最後の曲や路上ジャズ
古の王の仮面や星冴ゆる
読み耽る「騎士物語」霜夜かな
冬ゆやけ自転車に子を今日は父
リズム良く冬野を走る一輛車

平塚 丸屋詠子

夜会巻のほつるるままに冬の霧
水鳥の中島にゐて暮れかかる
都鳥思はれ人は浮気者
くりかへし焔ゆさぶる隙間風
ベルボーイ荷を輕輕と小春かな

さいたま 小林京子

神苑を掃く巫女ふたり神無月
波が打つ鳥居を崇む神無月
みぞるるや漬物仕込む桶並ぶ
黒土に豊作願ひ冬耕す
小春日や和服を粋に異国人

さいたま 岡田宣子

山を集めて出づる神の旅
木霊に乗りてふるさとを發つ神の旅
禅林の裏山深し朴落葉
朴散るや少し離れて易者の灯
気力限界けふは勤勞感謝の日

さいたま 篠崎紀子

山茶花の零るるままに古寺の道
空渡る吊橋の先薄紅葉

菅原真理

伊奈 菅原卓郎

江ノ島の海をなでゆく神渡し
竹細工つくる十指に秋日射す
野菊一輪蔓の細工の背負ひ籠

炬明りや男衆交はず山言葉
初冬や朱塗の椀のくずだまり
旅一座葛籠に朴の欠け落葉
墓跡を被ふひと夜の朴落葉
芋煮会湯気のむかうの国訛

残菊の裾より枯れて括られて

清水桂子

さいたま 皆川更穂

秋深き奥秩父路に照る夕陽
民話聴く子を愕かす朴落葉
永のつく年号数多知る冬夜
朴葉落ち寝物語の途切れけり

神立の先を導く道祖神
一条の雲の久遠や神の旅
常しへを貫く系譜朴落葉
朴落葉こはごは試すパスワード
磯宿の雨戸の鎖し冬に入る

初雪や萩の湯呑と花林糖
荒畑に冬瓜ひとつ朝の雨

池田珪子

森下山菜

黄落や黄金に染まる土まんぢゅう
草の花レマン湖畔のカルテット
屋久杉の御座船出来て神の旅

竹尺に溝のある訳文化の日
牡蠣焼く島ぼんぼん船は日に五便
囊中は自国名産神の旅
花鶏来るフランチェスコの講話の日
神のごと銀杏落葉に寝転んで

陸奥の秋の女子会厨から
郁子熟るる垣根の向かう女学校
そぞろ寒狛犬耳を敬てり
釜上げの蛸売る女そぞろ寒
高山の朴散る里の玄米パン

越谷 阿部幸代

夕風に不作の稲の軽さかな
往還の馬頭観音草紅葉
歩くあるく比企の丘陵天高し
焼芋食ぶ風の抜けゆく時の鐘
有明の空の清しき今朝の冬

熊谷 越田栄子

秋月とともに渡るや瀬戸の橋
錦秋の山に抱かれ峠茶屋
朴落葉天空に窓開け放つ
生き永らへてゐたる老松小春の日
四囲の街影絵にしたる冬夕焼

さいたま 山岸久美子

山茶花の溢れんばかり手水鉢
冬安居十反の布運ばるる
神渡し留守を守るやあうん像
神渡し漁師は木遣あげてをり
割烹着つけ紅引く先に都鳥

さいたま 梅澤輝翠

戦火の雲蔽ひ給へや神の旅
不可思議な陽気に惑ふ神の旅
大輪の花の香気や秋うらら
六文銭はためく郷や冬に入る
ライブ終へ光る舗道や冬に入る

霜多光代

キリストは嘆き案山子は傾けり
頂の類人猿の背に秋思
風止めば夕日を宿す烏爪
吾亦紅ミニマニストの部屋にかな
立冬の翅の重さよ蝶一頭

本橋稀香

凧や遠山の空濁りをり
凧の過ぎて白々明るる朝
凧や暴れん坊のへそ曲がり
焼鳥屋説教部屋の師弟愛
人生はいつもこれから冬の薔薇

千坂平通

暁光の雫に光る榎櫃の実
行く秋や戦力外の振るバット
裏返し更に焼かるる小秋刀魚
冬風や津波警報時計見る
心地よき日和そのまま冬に入る

加藤でん治

啄まれ明日は落つるか木守柿
初霜に手がポケットを恋しがり
初霜や置き忘れたる鎌捜す
スーパ一の種なし柿の甘味増し
秋茄子にある天性のひかりかな

杉戸 佐々木史女

山茶花や一夜に散りて潔し
近道をして後悔の牛膝
いつの間にもいらぬ土産の牛膝
バス停の植込み荒らす牛膝
筑波山から関東俯瞰神渡し

さいたま 竹澤和子

神無月仁王自慢の力瘤

さいたま 綿引まりこ

相客は舞ひ込む木の葉露天の湯
冬晴るる運勢吉で「待人来」

川口 木村小麦

月神の使者と張り切り跳ぶ兎
初冬の句碑に移ろふ影優し
風花の散り込む谷中築地塀
吹雪く夜やゲルニカの馬嘶きて

冬晴を生かせず無為の一日なり
子と共にただいまをして木の葉来る
あと五分からくり時計待つ冬日

若狭 山崎郁子

新井のり子

深秋や叔母の家まで歩を伸ばし
スーパ一の散らし赤赤秋深む
夕映えの瀬田の唐橋秋の風
秋風や半年待ちの新車来る
長き夜や読みたきものを積み上げて

冬晴や独居老人板につき
色かへぬ松の葉にらみ風の巾
冬晴の坂立ちこぎの娘たち
シャンソンのワンフレイズや木の葉雨
着ぶくれて体重計の異国人

団栗の降る夜聞こゆる太古の音

さいたま 寺町知子

赤色のポケットチーフ神の留守
初冬の夜半を騒がす救急車

さいたま 鈴木藻好

団栗を狐に供へ手合はず子
主人去り柿の実朱く残りけり
柿の実や二股竿の先の空
かな女忌や伯母の句集に声聞こゆ

庭統ぶる一輪立ての冬薔薇
料亭の廁の窓に花八手
冬屋に夜明けを知らず電波塔

西の市初更の空に手締め跳ね
冬うらら回る地球に貨物船
甘やかな陽十一月のテラス席
山茶花や仁王が守る朝の寺
祖師堂に木魚のひびく小春かな

さいたま 蛭田律子

冬晴やロイド眼鏡のわすれもの
蜜柑山登れば近き沖の船
よみがへる蜜柑の皮剥くきみの癖
潮風や富嶽をなぞる冬の鳶
冬風の鳶ひとまはり山ふたつ

さいたま 石関六弦

小春日や牛乳瓶の並ぶ湯屋
黒たまご喰らふ勤労感謝の日
独身の貴族なれども息白し
唐揚げに鳥のなり無し冬の星
立つ熊の人間臭きクマ牧場

吉川 拓真

冷まじや障子の穴を猫と風
黄落の華燭形見の一張羅
小春日や恋歌ばかり口をつく
生まれ来る子の名あれこれ小六月
宵寒に時のあるを幸とせむ

吉川 杉浦千祐

終戦に各国の意図冬ざるる
家康の坐像公開片時雨
各別な赤に足止め冬紅葉
病む妻に添ふ夫の黙夕時雨
庭の菊吾のが咲いたと笑ふ翁

山戸 美子

吊り橋は定員五名谷紅葉
山茶花の五十年経つ垣根かな
つつがなく過ぎて一年山茶花掃く
秋の夕大工独りで釘を打つ
飴細工のパンダかはゆし秋祭

さいたま 森下美智枝

奥山の雄鹿眺むる朴落葉
朴落葉虫の時に又落つる
百万石の加賀の庄屋や朴落葉
渋柿が採ってくれろと陽に光る
水引の紅ぼろぼろと庭の隅

飯田 忠男

木枯や山懐を駆け巡る
今を生く垣根の裾の帰り花
少年の励む自主トレ冬木の芽
夜半の冬宥むる雨のリズムかな
引出しの紅き口紅冬薔薇

若狭 岡本祥子

丸窓に散る山茶花を借景に
種になる前が勝負と牛膝
秋麗ビール工場試飲過多
秋茜なごむ工事の看板に
刈取りの済みし田圃を神渡し

さいたま 小川洋子

隙あらばさぼりたがるや神無月
水鳥の一撃放ち水の玉
軽トラに迷ひ猫乗る冬日影
神無月居のそこかしこ釘当てつ
水面に景映り込む水鳥や

さいたま 篠原さよ子

初霜や軒に干さるる草木染
磯小屋の干し網ぬらす秋時雨
半衿の花の刺繍や七五三
薄紅のシヨールふはりと町に出る
仰ぎ見る一番星や冬初め

湯浅 和

芸妓舞ふ京の座敷の栗おこは
竹林のこすれ合ふ音秋の風
万物に分け隔てなきけふの月
夫婦して昔を偲ぶ良夜かな
青空に映ゆる山肌秋深む

若狭 畠中八重子

時雨るるや然ても明るき一休寺
花椰菜白のまつたき朝の膳
木の葉舞ふ大人のピアノ教室へ
気がつけば車両に独り神の留守
正論のやけに響ける冬はじめ

大阪 遠藤人美

落種のひと眠りする枯野宿
初霜や鼻息荒き都井の馬
大根干すガードレールを拝借し
べつたら食む音も師走の夕の膳
鯛焼食む夫は尾から吾頭から

松村笑風
(登美江改め)

草の実やおなかすくまでかくれんば
心音の枕に響く夜寒かな
飯おさい草の実づくしおままごと
縁側に座布団広げ小春の日
図書室の気だるき午後や小春の日

さいたま 森美枝子

立冬の朝思ひ立ちチケット買ふ
神の旅ANA四五二便ふるさとへ
全身を耳に講義を体育の日
山里の珍珠盛りたる朴落葉
十一月街は早早極彩色

さいたま 鳴海順子

ネオン消え街は無色に氷雨降る
氷雨降るコート襟立て女優かな
トレンチのギャング来さうな氷雨かな
着飾りて親子三代七五三
爺ちゃんの手にも木履と千歳飴

さいたま

北山建治郎

せせらぎを辿り辿りて寒鴉かな
朝餉の香行くさきさき冬の冬日和
我が胸に迎へいたき冬の虹
冬至風呂過ぎ行く日々が溢れけり
薄日さす空の哭き声冬季雷

さいたま

鈴木香音子

寒椿手折り茶室に客待てり
読み返す友の手紙や初時雨
初冬の庭や寂れて来たりける
靴下の厚手求むる冬はじめ
鷺一羽優雅に歩く冬田かな

高原和子

山粧ふ麓に古き尼寺よ
つるし柿甘くなれよと呪文かけ
早朝よりドクターヘリや鶴騒ぐ
カーテンより透ける日差しやそぞろ寒
追憶は銀杏落葉の御堂筋

和歌山

嶋田洋子

笹の葉のそぞろ流るる神無月
神無月自在に通ふ峠風
朝市に名入りの野菜神無月
南天の葉のひらひらとみぞれけり
棕櫚竹の葉の乱るるや雲降る

秋谷風舎

人住まぬ村を案内す捨案山子
つり橋の先の秘湯や冬ざるる
七五三着付け忙しき姉妹
冬田道沈む夕日や鴉鳴く
宝くじは外れ寒風に向かふ

さいたま

山下ユリ子

とろろ汁播るも修行や坊の宿
相席の微かな訛りとろろ汁
屋台酒夜寒に点る中洲の灯
初霜や赤錆匂ふ歩道橋
湯豆腐やぼつりと本音次男坊

大熊健司

北斎の籠に会ひたし栗のいが
ピアノ弾く黒光りして葡萄の実
袖振れば樟脳の香が七五三
すすきの穂孫の背を越えかくれんぼ
やるせなき争ひ止まず冬来る

東京

畑宮栄子

手をすりて暦をめくりたる夜寒
切干しに母の匂ひの夕餉かな
短日や樹を伐る人の影長し
立冬の水面をたたく夕嵐
水底の魚も動かさず今朝の冬

さいたま 持谷寿夫

初霜や無音の庭の朝まだき
初霜や始発電車の前照灯
初霜や更地になりたる金物屋
湯豆腐や手酌の夫の薩摩焼
湯豆腐のぐらりとくれば杯鳴らす

さいたま 森 和子

夕映えの十一月の櫛かな
わだかまり解け大きな毛糸玉
七五三ひげの神主恵比寿顔
一片の雲なき御空七五三
七五三鳩追ひかくる男の子をり

東京 柳父はる

結び上げたる髪を羨む七五三
母も子も牛の神社の七五三
七五三祝三代つなぐ紅い被布
還暦や夕日に光る木守柿
記憶なき父の目の先木守柿

東京 山中いちい

雨音は静かになりぬ散る雲
霽るるや上野大仏涙あと
神無月甘味処の招き猫
神無月上野の森にヴィーナス来
小春日や上野界限小旅行

さいたま 樋口元美

麦の芽のひと雨ごとのにのびる朝
高き山したり落つる秋の水
どんぐりをころがし遊ぶ子猫かな
どの家も色こくなりてつるし柿
色づいて籠いつぱいのみかんかな

鬼石 加藤ナヲ子

木星もともに輝き十三夜
コスモスの終り哀愁ひそみけり
気にかかるドッグの結果神の留守
茶の花や庭よりそつと外出す
柿実る鳥の目利きの確かなり

鬼石 榊原聰子

女子会に予約の焼き芋抱へ来る
差し入れの焼き芋一本残業す
焼き芋を半分こする乳歯の子
義母の杖置かれたるまま冬来たる
コーヒーの豆挽く夫や今朝の冬

所沢 飯室夏江

湖に映る黄衣着る山神無月
リビングに斜陽の満ちて神無月
雲空荒れて泡立つ能登の海
彼の人の逝去知る宵雲たつ
集りてキムチ作る日冬ざるる

さいたま 前田英子

ネットから覗く蜜柑を連れ帰る
故郷の荷物に鎮座蜜柑かな
大岩に大影映す冬日和
冬晴のライン下りや声黄色
大紅葉ライトアップで二度楽し

さいたま 小田三茅

水鳥の独り芝居を演じをり
浮寝鳥最終列車の一つ前
神無月わが家の神はどここへやら
神無月出雲行きたし金はなし
ちらと見る賽銭箱や神無月

川島夕峰

タクシーの待つ列長し星月夜
原付の自転車の旅黍嵐
冬紅葉バス乗り継ぎの行楽地
初冬や温度差悩む服選び
秋時雨レトロなカフェでコーヒーを

武田重子

ほとばしる蛇口の水や黒葡萄
「今度」とは永久に来ぬ日や流れ星
街走る熊の子の眼の母を追ふ
今朝の冬厨仕事の指の荒れ
七五三父母と祖父母とべそかく子

羽島秀子

手拳げても引き摺る吾子の千歳館
ニューヨークへ文添へ送る千歳館
迷ひ猫の声の哀しき氷雨の夜
また一軒空き家となりて朝氷雨
傘無くて氷雨に揺らぐ千鳥足

北出久美子

戦ふはヒト科遣伝子寒鴉啼く
寒鴉ガザの悲嘆を如何せむ
一撃に新たな廃墟冬の星
悲劇見る辛さどこまで虎落笛
大らかに阿弥陀堂あり冬銀河

岡田芳春

冬ぬくし水面に並ぶ鯉の口
庭箒出番数多や柿落葉
しやりしやりと米とぐたべ震かな
冬晴れや筑波の山の迫り来る

綿貫ひさの

満願の眩しき朱印秋遍路

さいたま 香田裕誌

草紅葉尾瀬の歩荷や気負ひ込む

賑はひて貸し農園の秋収め

さいたま 石井直子

散るを知りはたまた惜しむ溪紅葉
ぼつねんと過す空白虫時雨

大和路の光る瓦や吊し柿
侘助や共に手を取り二月堂
初時雨明日香の昼の焼きカレー

紅き実ももみぢも愛でむ花水木

駒谷行雄

落し物戻つて来たり初時雨

木谷葉子

長き夜に丸谷才一ふさはしく

初時雨立木観音笑むごとし

銀杏は割つてチンしてエメラルド
黙々と柿の皮剥く母小昼

草々の萌黄失せたり冬の原
冬の夜やICUの父領きぬ

赤き橋潜り江ノ電萩の古寺

宮代 関谷多美子

新しきセーター鏡に領きぬ

三浦真由美

暮の秋木橋を渡る子らの声

青空に枯葉の木立続きをり

八冠の将棋の化身大銀河
そぞろ寒かたりと夕べ猫入り来

枯葉焚く煙の向かう祖母の顔
古道行く杖つく夫に秋の風

赤提灯しみじみともし小夜時雨

大阪 飯塚智恵子

ラーメンの湯気の向かうの霏かな

横山礼子

停戦を祈り供ふる今年米

寺町に霏蕭蕭鐘遠し

逆剥けの母似の指や秋の暮
冬ざれや逃げつつ振り向く野良猫

しやわしやわとシャンパングラス霏立つ
御神籤は又の機会に神無月

冬来る廃墟の島に白き波

草加 持永喜夫

水鳥や古巢恋しと舞ひ戻る

和歌山 南條さわゑ

人の無き軍艦島の夜寒かな

熟年や童謡歌ひ秋うらら

二日酔ひ風邪を引いたと朝寝坊
冷やかさも夜寒の町に絆されし

デイサービスの友を送りし暮の秋
冬鴉の群早朝に追つばらふ

かみ合はぬ会話に疲れ冬たつ日
炬開きや選りぬかれたる白椿
残し置く小鳥の分や庭みかん
もてなしは白磁の皿の黒ぶだう

藤 沢 小島喜代子

手袋もせず車椅子爺自走
関節の曲がりたる指に冬到来
羽広げ鴨早朝の身繕ひ

東 京 深沢りこ

鶴をむかへるとき白き花

東 京 大島千恵

明けの空語らふごとく星と月

父の倍生きて八十路や秋明あきか
早世の流れ壊さむ誓ふ秋
寺町の近くに住みて秋の宴

藤 沢 藤田寛二

水鳥と仲よき如くスワンボート
木の葉落ち水面に泳ぐ鳥のごと

野仏は駄々を捏ねたり神無月

さいたま 糸井しるく

霰るるや転びし子の手母のもと

風の道手水に浮く冬紅葉
霰るるや歌舞伎の演に蛇の目傘

霞草出会ひと別れ知つてゐる

所 沢 関根千恵

酒屋や歴史を歩く嵯峨日記

夜の厨漣寄する浅蜷桶

「うんち」して誉められてゐる子猫かな

犬連れて石焼芋のにはひ追ふ

さいたま 緒方みき子

兄弟で分くる焼いも黙黙と

窓開けて神頼みする今朝の冬

☆

☆

作品評

山本鬼之介

れているこの地の風物詩である。
晩秋のひと日、金沢を訪れた作者は、兼六園の紅葉を堪能し、武家屋敷や茶屋街を散策し、二つ川の橋を幾つか渡って旧き佳き時代の人々の俤や町々の風情を懐旧したのである。季語と二つ川が多くなことを読者に伝えている。

肌寒や金沢過る二つ川 元田亮一

高層のビルは墓標ぞ冬夕焼 反町 修

加賀百万石の名残が各所に見受けられる文化都市金沢には、年間を通して多くの観光客が訪れる。北陸新幹線の開通によって、大宮からほぼ二時間の近さになった。さらに、今春には待望の敦賀まで延伸するので、水明のふるさと若狭が、一気に近づくことになる。

さて、掲句に書かれている二つの川とは、言わずと知れた「犀川」と「浅野川」である。金沢城趾の両側を並行して流れる二本の川は、西側が男川と呼ばれる「犀川」で、東側が女川と呼ばれる「浅野川」である。前者は三四・五kmで川幅が広く直線的で流れが速い。それに対して後者は二九kmで川幅が狭く曲線的で浅く流れも緩やかなので歩いて渉れるほどである。犀川の兩岸の道はジョギングなどの運動目的の人に多く利用されているようだが、浅野川は近くに茶屋街もあり、和服姿の散歩とも見受けられるようだ。浅野川の緩やかな清流を利用した加賀友禅の「友禅流し」は、昔から引き継が

夕焼けに染まった冬空を背景に、高層のビルが並んでいる。夕陽の逆光になっているビル群は、一様に濃い灰色を呈して表情が無く、心肺機能を停止して血の通わなくなった人間の様に見える。作者は「墓標」という言葉によって端的にその景色を表現している。係助詞の「ぞ」が、「墓標」意外に言うべき言葉が無いという作者の心理状態を表している。

ちなみに、この夕景は、作者の居住地から眺めた「さいたま新都心」の姿なのである。筆者も以前に同様の体験をしていたので、この句を抵抗なく受け入れることができた。

碧天に稜線つづき神送り 西幅 公子

晴れわたった紺碧の秋空の下に、形よく稜線がつづいていく。登山者にとって、実に気持ちよく、元気づけられる景色なのである。これから自分たちが踏破するルートを確認し歩を進める。人が歩いて行く稜線を、神立の神々が渡って行

く道筋と思えば、そこから壮大な物語が生まれてくるのではなからうか。山好きの作者ならではの一句かと思う。

立冬や湯舟で伸ばすふくらはぎ 新 曆文

曆の上では紅葉の盛りとなる晩秋であるが、立冬という語感には一年の終盤をイメージさせるひびきがある。最近、息子さんに後を託して引退した会社の仕事の一部を手がけるようになったと聞いたが、立冬の夜、湯に浸かって手足を伸ばしている開放感がよく伝わってくる俳句である。

リズム良く冬野を走る一輛車 丸屋詠子

日本の各地でローカル線が頑張っている。その地域の住民の足としての役目に加えて観光客の交通手段としての役目もあり、結構乗客の多い路線もあるようだ。何れにしても、連結している車輛の数は少なく二輛か三輛程度で、路線によってはたったの一輛というのもある。おもちゃの列車のように、かたことかたこと懸命に走る姿は実に微笑ましく、つい「頑張れ!!」と応援したくなる。枯れ色になった冬野の景色は淋しいが、一輛車の心地よいリズムが、華やかな舞台を作っているように思えてくる。

夜会巻のほつるるままに冬の霧 小林京子

夜会巻は、夜会結びという名称で辞書に解説されており、明治・大正期に流行した束髪の一つと記載されている。明治では鹿鳴館の夜会にも登場したかと思うし、尾崎紅葉の小説「金色夜叉」にも夜会巻が出てくる。本句が当時の夜会巻を題材にしたものかと思ったが、現今でも便利な用具を用いて夜会巻の髪形に出来るようで、なるほどと合点がいった。

和服に夜会巻の婀娜な女が、洋館でのパーティーで、火照りを冷まそうと冬霧の立ちこめるバルコニーに佇んでいる情景を思い描いてみたが、筆者としてはやはり往時の本物の夜会巻への愛着を捨てきれない。

神苑を掃く巫女ふたり神無月 岡田宣子

神社の境内にある庭園に降り積もった落葉を竹箒で掃いている二人の巫女であろう。アルバイトではなく、正規の職員として働いている巫女だと思う。互いに口を利かず黙々と仕事しているのか、それとも時々手を休めて談笑しているのか、なかなか興味が湧く。神無月なので、鎮座されている神様も出雲へ旅立たれており、リラックスマードなのかも知れない。

野菊一輪蔓の細工の背負ひ籠 菅原真理

蔓を使った細工物は、独特の風合があつてよい。新しい物もよいが、年月を経たしっとりとした艶が出た物もよい。蔓

を用いた自作の背負い籠に、野良仕事の帰りに摘み取った野菊の一輪を入れての家路、想像しただけでうっとりする。

朴葉落ち寝物語の途切れけり 清水桂子

何とも素敵な俳句である。「寝物語」は、主に夫婦関係にある男女の寝ながらの会話を意味する言葉であるから、当然この二人が円満な状態にあることが予測される。何時の間にか相手の心えが途絶え、気がついたら寝息が聞こえてきたというような雰囲気である。無粋にもどさつと朴葉が落下して、幸せな時間を中断してしまった。

荒畑に冬瓜ひとつ朝の雨 池田瑠子

畑の持ち主が高齢で手入れが行き届かず、荒れた状態になった畑であろうか。採り残された冬瓜が一個転がっている。朝方から降り出した無情の雨。季節的にそれ程冷たい雨ではなからうが、目視的には冷たさを感じる雨である。残された一個の冬瓜から感じとる印象なのであろうか。

気力限界けふは勤労感謝の日 篠崎紀子

いろいろと考えることや為遂げなければならぬことが集めた一日で、これ以上はどうしようもない状態である。気がついたら今日は勤労感謝の日で、例年自分には縁のない祝

日だと思っていたが、今年の今日は勤労者の労苦を身を以て体験したように思った。

旅一座葛籠に朴の欠け落葉 菅原卓郎

今時つづらが使われている場所はごく限られていると思うが、その一つとして大衆演劇の旅芸人一座はびつたりである。他に思い当たるのは相撲部屋くらいであろうか。もつとも、高齢者の居る一般家庭には、雑多な物を押し込んだ葛籠が納戸部屋で埃を被っているかも知れない。さて、それにしても旅一座が使っている葛籠の中に如何にして朴落葉が入り込んだのか。句の読み手にいろいろと推理してもらおう。

神立の先を導く道祖神 皆川更穂

「神立(かみたち)」は「神の旅」の傍題で、掲句の句意は、「出雲大社へ全国の神が集結する際に、各所の道祖神が細やかな道案内をする」ということである。人と同様に神様もいろいろの方がいらつしやるので、車のナビのように「出雲大社」と入力してボタンを押せば目的の場所に瞬間移動できるといふことではないようだ。地図を見ながらうろろうろしている、在所の道祖神がやってきて、『あとは任せんしゃい』と親切に道案内してくれる。普段は目立たぬ存在であるが、年に一度見せ場のある道祖神である。

囊中は自国名産神の旅 森下山菜

出雲大社へ行く神様が担いでいる袋の中に、自国の名産品が入っているという前句につづいてこれまた大らかで愉しい俳句である。江戸幕府に譬えれば老中クラスの大神への献上品や、親しい友人のような神様への土産なのである。想像を逞しくすると、人間が勝手に作った「神の旅」という季語の味わい深さが解ってくる。

釜上げの蛸売る女そぞろ寒 阿部幸代

漁港の朝市。大きな釜の中から茹で立ての蛸を取りだして売っている女。年の頃は三十後半か。口数が少ないが、てきばきと商いを熟してゆく手際が見事である。「目は口ほどに物を言う」の慣用句のように、時々目が示す笑いの表情が魅力的である。女の隙を狙って生きた蛸が逃げてゆく。

四囲の街影絵にしたる冬夕焼 山岸久美子

西に傾いた太陽が冬季ながらも雄大な夕焼空をつくり、夕陽を背にしたぐるりの街が影絵のように日中とは違った様相を呈している。その様子をじっと眺めていると、影絵となった街の中へ引き込まれてゆくような気がしてくる。ひと時の不思議な感覚である。

大輪の花の香気や秋うらら 霜多光代

この花は多分菊花展で大賞を受賞した名花であろう。秋晴のひと日、菊花展を訪れた作者の鼻孔に大輪菊の香が迫ってくる。実に優雅で幸せな日である。

焼鳥屋説教部屋 師弟愛 千坂平通

拘りの焼鳥屋なのであろう。創始者の親が見込んだ店員にみっちりと技を叩き込み、店長にして新規店を広げてゆく。理屈ではなく、当人の身体に覚えさせてゆく昔流のやり方である。説教部屋とは親方の個室であろうか。其処で相手が男泣きするくらい厳しく絞りあげ、最後に『お前が頼りなんだよ』と、甘い言葉投げかける。さて、客の反応は如何に。

歩くあるく比企の丘陵天高し 越田栄子

「歩こう会」のイベントに参加したのか、その爽快感は格別であったと思う。鎌倉幕府の御家人であった比企能員が治めていた比企丘陵は、ハイキングに持って来いである。

割烹着つけ紅引く先に都鳥 梅澤輝翠

この句の三つの言葉が導き出す人物像は、近くに都鳥がいる土地の小料理屋の粋な女将である。今日の料理の準備が済み、割烹着をつけて念入りに紅を引き、さあ開店。

水琴窟

(十二月号鑑賞)

池田雅夫

側転の少年皓齒爽やかに 森 和子

「皓齒」は白い歯のこと。その白い歯に焦点を合わせたところに注目。昭和の時代には子供らの遊びの中で、馬跳びやら逆立ち、前転そして「側転」などが行われていた。きれいにできた側転に、はじける笑顔の少年の姿が目には浮かぶ。

宵闇や庚申塚の蠢かむ 飯田忠男

「宵闇」は、満月を過ぎて二十日月ごろからの、暮れてから月が出るまでのあいだの闇のこと。「庚申塚」は、庚申信仰によって建てられた塔のある塚。闇の中で何かの気配を感じた。「蠢かむ」と推量、仮想の意の表現が巧みである。

翻り白さを残し秋つばめ 岡本祥子

燕の背は全体に黒紺色で、腹部は白い。秋は南方へ渡るので体力を蓄えるために飛んでいる虫を捕食する。風を切るように翻り、その速さで白い腹部が残像となり目に焼きつく。

秋風や足取り軽くポストまで 寺町知子

極暑の夏の日中は熱中症にならないように、外出にも気をつけなければならなかった。秋になった今は「秋風」が爽やかに吹き、句心も豊かになり、「足取り軽くポストまで」投句するのが楽しく嬉しいことと感じているのだ。

福祉課の手話の応対秋澄めり 湯浅 和

近年の市町村は福祉行政に力を尽くしている。高齢者ばかりでなく、あらゆるハンディを持つ人に優しく対応してくれる。「福祉課」でも「手話の応対」が充実しているようだ。「秋澄めり」の季語がいつそうすがすがしさを与えている。

白と黒雲の引きあふ運動会 畑宮栄子

抜けるような秋空の下での「運動会」とはいかず、白雲と黒雲が空を覆っている。時折の日射しで絶好な運動会日和。「白と黒雲が引きあふ」に綱引を連想し、楽しい句である。「白と黒」で切り、以下を読み下すと句意がはつきりする。

新涼や目覚めて白湯の旨きこと 鳴海順子

秋のはじめに感じる涼しさを「新涼」という。それまでの暑さから開放され、その涼しさに、冷たい水よりも「白湯」のあたたかさで弛れていた体の動きをよび覚まししている。

老犬に歩み合はせて星月夜

榊原聰子

月のない秋の夜、満天に輝く星の光があたりかも月夜のように見えるのが「星月夜」である。夏の猛暑は老犬にはつらい。ゆっくりとゆく「老犬に歩み合はせて」いて、ふと天を仰ぐと、寶石のような星空であった。その感動が伝わってくる。

秋澄むや矢を番へたる黒袴

石関六弦

「矢を番へたる」は、弓の弦に矢をつけること。黒袴に身をつつみ正装した射手がゆっくりと取り出して弦に「番へ」ている。凜とした表情、間合いがひしひしと伝わってくる。「秋澄むや」の季語の意味合いが充分に活かされている。

おにやんま池塘ひらりと横切れり

石井直子

山地にすむ「おにやんま」は日本最大のとんぼ。黒と黄の縞模様が美しく、その飛翔は悠然としている。開けた場所の「池塘」をゆったりと横切るおにやんまに圧倒されている。「池塘をひらり」にすると「横切れり」の主語が明確になる。

花茗荷友と見つくる下山道

前田英子

小高い山に登ったのだろう。下山の途中で「花茗荷」を見つけた。薄黄色の花は清楚でなければならない。「花茗荷友と見つくる」と有りのままを全部言わない工夫をすすめる。

子規の忌や気を永うして糸瓜水

柳父はる

「子規の忌」は九月十九日。「糸瓜忌」「糶祭忌」とも言う。子規の糸瓜の三句は絶句として残っている。「糸瓜水」は痰切りの薬として用いられる。子規の亡き今、「気を永うして糸瓜水」を採取している。季重なりも止むを得まい。

秋の灯よ俯きて行く影ひとつ

北出久美子

「俯きてゆく影ひとつ」の背景は知りえないが、とかく秋はもの思いに更けることが多い。心に秘めた何かふつきれないことを抱えているのだろう。「秋の灯よ」の呼びかけに惹かれた。感動、詠嘆の意の「よ」が一句をひきしめている。

ちろちろと帰路照らすかに虫の闇

飯塚智恵子

「ちろちろ」が「ちろちろ虫」の響きに重なる。街灯もなく民家もまばらで、空き地や畑が広がっている郊外の道であろう。闇深い静かな路に虫の音がひびく。「照らすかに」の措辞は音の世界に光明を与える効果がある。意図を称えたい。

江の島や春の遠足姉と会ふ

藤田寛二

小学生時代の遠足を思い出しているであろう。当時の姉は「江の島」の近くに住んでいたので面会に来たのだ。その懐かしさを、今の江の島に重ねている。「春の」は無くてもいい。

大村節代 選

鼓
笛
集

くしやみする音の小さきや小さき人
ポーナスの知らせ劇団四季予約
全味のカップヌードル冬籠

吉川拓真

啄木のふるさとの山眠りをり
北限の海女の里にも冬の風
話に花やひつつみの鍋囲む夜

阿部幸代

眠る山ひとすぢ煙る登り窯
お地蔵の宝珠揺するや空つ風
天空に響動む唐人笛冬銀河

菅原卓郎

初霜や歯にしみ通るミントの香
熱爛や手持無沙汰に聞く惚気
熱爛や酔へば十八番の黒田節

森美枝子

ロヒンギヤのテントの破れ雪催
難民の嬰兒つつむ赤毛布
絵付けする胡坐の少女青木の实

池田珪子

冬うらら楽焼で飲む老夫婦
万感や怒濤の如き冬紅葉
足元から崩れゆくなり忘年会

篠崎紀子

青畳湯気立ちのぼる寒稽古
牛井の真中に落とす寒卵
山腹に彩り添ふる冬桜

反町 修

出刃を研ぐ光る滴の冷たさよ
冬帽子被り直して家を出る
マフラーを緩め屋台の湯気に入る

加藤でん治

山茶花のどつと開花や万の蕾
トラツクの白菜おろす庫裏の庭
八十路来て気づく温情冬銀河

西幅公子

山眠る湯煙ふはと吐きながら
おすそわけ野菜を友へ冬田道
木枯の去りて黄色の吹溜り

湯浅 和

雑炊のコーゲンたつぷり肌ピンピン
さあ出来た皆覗き込むふぐ雑炊
すつぽんの雑炊土鍋は黒光り

北山建治郎

年の暮コックリさんとAIと
あこがれと心変りと山眠る
失望と希望が綱引き除夜の鐘

山下ユリ子

早々と樹の芽角出す小春空
小春日の庭に雑草躍り出で
めづらしや畑に二羽の村千鳥

山岸久美子

鰯雲クリテリウムに人の垣
初挑戦レシビ通りに秋の鯖
褒美の寝溜めの勤労感謝の日

武田重子

年の暮今度こそはと日記買ふ
年の瀬に野の花植わる銀座街
北風やシニアのゴルフ熱を込め

畑宮栄子

大欠伸炬燵も暇を持て余し
初恋は弥生とともにやつて来る
根詰めて夜なべとなりぬ針仕事

佐藤克之

冬の暮盆栽村のイルミネーション
柿落葉残り葉わづか老人ホーム
額縁は病室の窓冬の月

樋口元美

年用意中外分かつ女夫かな
枯葉踏む見上ぐ大木丸裸
妻覗くうつらうつらの柚湯かな

安倍弘夫

麗かや浦和の街も人人も
せがまれて鞆を押す一会かな
春雨の雨垂れ絶えぬ足湯かな

秋谷風舎

☆

☆

鼓笛集作品評

大村節代

ポーナスの知らせ劇団四季予約 吉川拓真

ポーナスの使い道の説明などいらない。劇団四季予約で、その高揚した気持まで読手に伝わる。予約したのは、一番人気の「オペラ座の怪人」か「ライオンキング」か、はたまた最新の「ゴーストレディ」か、余計な詮索は野暮というもの。楽しんでいらして下さい。

話に花やひつつみの鍋囲む夜 阿部幸代

寒い夜の、一番の御馳走は何と言っても鍋料理。材料を用意しておけば、誰かがせつせと働かなくても、皆でゆつくりと笑って、食べたり、話したり出来る。

ひつつみが分からなくて広辞苑を引くと、すいとんに似た東北地方北部の郷土料理と出ている。冬の夜にはほっこり暖まりそうな鍋である。

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解） 佐々木史女

三方五湖展望台のなごり雪

若狭路の旅は逝きし子と二人旅で二泊三日のバスツアーでした。天の橋立 伊根の舟屋の見学をし、翌日の三方五湖は、晴天で見晴台からの眺めは格別でした。折しも雪が降り俳句を作るのにいい材料に恵まりました。帰路のバスに乗り出発しました。道路の外灯が赤く点滅し地震の情報が入り、一般道へ下りました。富士山の麓を廻り、バスは秩父山を越えて久喜に着きました。これは十二年前の東北大地震の私の行動です。令和六年一月一日の能登半島地震も大変な災害です。「悪しき事いくつ重なる年始」

天空に響動む唐人笛冬銀河 菅原卓郎

天の河は、春は地平に横たわり、冬は天空かかる。寒い夜に、その銀河のかかる空を見上げながら、唐人笛（チャルメラ）が近づくのを心待ちにしている。

網野月を選

山紫集

大根引く予約のとれぬ整体師

森美枝子

大根引煙たなびく浅間山

反町 修

二階家の人と目の合ふ大根引

元田亮一

来日の若衆が頼り大根引

岡田宣子

——以下略選

大根引家族総出の日曜日

加藤でん治

ヨイドン競ふ家族の大根引

川島夕峰

嫁さんもいつしか馴染み大根引

熊倉千重子

道を問ふ一茶の笑みや大根引

河野はるみ

うんとこしよ足と穴との大根引

小駒さち子

大根引く大地は深く息を吐く

越田栄子

賑やかな貸し農園の大根引

後藤綾子

だいこ引き山に斜めの噴火口

菅原卓郎

尻込みと縁の無き生大根引く

青木鶴城

大根引天水かくも蓄へし

横山礼子

女体かと思ふ蛸足大根引

西幅公子

ドーナツの穴に青空大根引

檜鼻ことは

伝説のエクスカリバー大根引

本橋稀香

大根引おふくろ様の尻丸し	小林京子	大根引く力抜けたる穴ひとつ	菅原真理
見送りの従妹土産の大根引く	近藤徹平	我家の三役揃ひ踏ん張り大根引	杉浦千祐
花壇すみそれなり育つ大根引く	榊原聰子	踏ん張れば良しと習ひし大根引	鈴木藻好
大根引話かけられ二三本	佐々木史女	掛け声の分だけ大き大根引く	鈴木玲子
大根引き婆の尻餅地響きす	笹本啓子	小学校の畑元気に大根引	関谷多美子
学童の腰ふんばりて大根引	清水桂子	大根引腰を伸ばせば三浦の海	瀬戸雄二郎
儘ならぬ一日見据ゑ大根引	篠崎紀子	踏ん張つて丸太のやうな大根引く	染谷風子
風急かす一竿ほどの大根引	篠原さよ子	空背負ひ佳境に入る大根引	高島寛治
霜注意報家族総出の大根引	渋谷きいち	尻餅の可愛い笑くほ大根引	高橋満耶子
リヤカーに大根積んで子も乗せて	嶋田洋子	手伝や初経験の大根引	武田重子
大根引く父子の掛け声相和して	霜多光代	地獄から引き上げるかに大根引	田中章嘉
大根引囃す鴉の二羽三羽	下川光子	子らの声響きわたるや大根引	南條さわゑ

まちまちの母の作りし大根引	西浦千枝子	大根引く外つ国よりの働き手	町野広子
大根引く美人不美人勢揃ひ	野口和子	身仕度のかろき子ら来て大根引く	松井由紀子
来年は整地にならむ大根引く	野田静香	大根引く持ちたるままの立ち話	松宮保人
菜園で尻もちついて大根引	野村美子	大根干され上州高崎発車ベル	松本光子
爺と婆腰を伸ばして大根引く	畑宮栄子	大根引お隣さんのお裾分け	丸屋詠子
大根引ミロのヴィーナスまろき肩	原田秀子	大根引落暉に映ゆる男体山	丸山マシミ
眼下には駿河湾見ゆ大根引	樋口元美	青々と畝かくす葉や大根引く	宮崎チアキ
夕鳥見送る野辺のだいこ引き	日高道を	朝取りは泥付きままの大根引き	持永喜夫
大根引く尻もちといふ裏技で	福田千春	菜園のをちこち尻餅大根引	森 和子
穴窯の煙立ちたり大根引く	保坂翔太	母の忌に和む面面大根引	森川義子
一本に農婦の気合大根引	曲淵徹雄	白い肌出して背伸びの大根引	森下美智枝
大根引く三浦の波の音遙か	正木萬蝶	畝またぎ精魂をこめ大根引き	山岸久美子

ランドセル駆ける畦道大根引く

山下ユリ子

渾身の力くらべや大根引

池田雅夫

大根引尻餅つきてひとり笑ひ

山中いちい

大根引一生ものの下ろし金

石田慶子

大根引く大地まるごと引くごとく

湯浅 和

大根引く自称草食系男子

石川理恵

地霊にと一本残す大根引

横山君夫

大根引く泥手で小遣ひ渡しけり

井上燈女

讚美歌を心に塔下大根引

吉川拓真

肥沃なる畝ながながと大根引

井上玲子

大根の染みて味出る役者かな

綿引まりこ

大根引今日の酒菜は味噌なます

上戸千津子

吹き下ろす風清けしや大根引

秋谷風舎

花柄のスクーフひらり大根引く

内田恵子

大根引く若妻の肌みづみづし

新 曆文

大根引海辺畑の器量好し

梅澤輝翠

土塊を拭ふ手やさし大根引

阿部幸代

白妙となるまで大根洗ひけり

梅澤佐江

大根抜き笑ひ出したる膝頭

荒井俱子

大根引く三浦のやはき風を背に

大場順子

温泉に浸かるカピバラ大根引く

飯田忠男

大根引一本落す猫車

池田珪子

☆

☆

山紫集作品評

網野月を

だいこ引き山に斜めの噴火口 菅原卓郎

大根を収穫した跡の穴が「噴火口」に見えたのだろう。大根が斜めに生えていたのであろうか、作者が大根引きをして山に穴を穿ってしまったという何とも極端な言い回しに滑稽さを覚えるのだが、大根ならではの誇張表現である。それとも、大根引をしている畑から作者の視界に「斜めの噴火口」が見えていると解せるかも知れないが、やはり穴を穿ってしまったと解した方が面白い。

尻込みと縁の無き生大根引く 青木鶴城

中七の「生」は作者ご自身の人生のことであろう。「大根引く」勢いがその「尻込み」しない勢いに相応している。さぞかし豪快に「大根引き」をされるのであろう。勢いをつけて何事もえいやつとしてける作者ならではの措辞である。座五の季語「大根引く」が句を人生訓のような説教がましい

ものにしないうで、むしろ自嘲をも含めた表現にとどめていて好ましい。

大根引く天水かくも蓄へし 横山礼子

中七座五の句意は、「天水」ということから瀬戸内の溜池のようにも解釈できるのである。大根畑の周りに大小何カ所も数える溜池を想像する。また他の解釈としては、大根そのものに「蓄へ」られた水分のこととも解せる。とすれば、瑞々しいばかりの大根なのである。

女体かと思ふ蛸足大根引く 西幅公子

大根の根の在り様を見事に描写して見せている。「女体」はつまり、その白さであろうし、また丸みを帯びたその豊かさでもあろう。「蛸足」はいくつにも分岐していることを表している。少々、艶めかしさも伴っているようだ。が決してこの艶めかしさは淫靡なものでは無くて、健康な色気なのである。「大根引く」と言う季語の為せる業である。農業労働の直向きな作業が健全性を担保している。

ドーナツの穴に青空大根引 檜鼻ことは

哲学的命題を表出しているように筆者には読める。ドーナツは空(くう)の部分「穴」なのか、「穴」を取り巻くドーナツの内輪が「穴」なのか、ということである。東アジア

文化圏には古来、そういった時空間の認識論的思考が文学や歴史、哲学と言った人文の原野に内在していたのである。閑話休題、そんなことを思考している暇人の視界の先のその「穴」には青い空が見えている、と言うことである。

伝説のエクスカリバー大根引 本橋稀香

「エクスカリバー」ならば「伝説」は要らないかも知れない。アーサー王伝説には欠くことの出来ない神器であるからである。そのところを敢えて「伝説」と言い切って、作者ご自身が主人公になり切ろうとしているのか。それならば掲句はロマン主義なのである。大根を引き抜いた作者は、空高く大根を突き上げたのだろう。

大根引く予約のとれぬ整体師 森美枝子

農作業の後の祟りが怖いのかも知れない。腰のあたりに手をやって、そろそろ疲労感がたまってきたことを自覚すると、作者の脳裏には予約の取りづらい「整体師」が浮かび上がってくる。その瞬時の作者の気懸かりが読み取れる。季語「大根引く」の本意の新しい領域が広がってゆく感がある。

大根引煙たなびく浅間山 反町 修

信州から浅間山を望んだ景であろうか。信州の高原は紅芯大根、紫大根など鮮やかな色合いの類の大根の産地である。

丁寧に収穫する農人の姿が想像される。煙は作者の視線からすると右手の方、つまり南東へ向かって棚引いているのであろう。大根を引き寄せながら、煙は遥か向こうへ逃げてゆくような、逆のベクトルを感じとれる。

二階家の人と目の合ふ大根引 元田亮一

力を入れる際にはあらゆる方向に視線が行くものである。もちろん「二階家の人」物はこちらを凝視しているのであるから、自然と目と目が合うのである。作者ご自身が意外な成り行きに戸惑っている風である。あつ見られていたのだ、と言うことである。中七の「合ふ」は終止形として解して、少しばかりの間を感じたい。

来日の若衆が頼り大根引 岡田宣子

「若衆」とは、技能実習生であろうか、それ以上は情報が無いので分からないが、「若衆」は収穫を手伝ってくれている。一見、外国の方と分かる人が大根の収穫を手伝っているのであるが、筆者は、然程広くもない畑で、「若衆」一人が老夫婦の作業を手伝っている景を想像した。決して手際が良いわけではないのだが、その人たちの仲の好さが滲み出てくるような心の近さが感じ取れる。それは取りも直さず作者ご自身がそういう眼差しで景をとらえているからだろう。

インターネット句会のご案内



水明では二〇一九年よりホームページを立ち上げ、毎月の更新をしています。ページのコンテンツは、水明の組織及び主宰の紹介、水明毎号の主宰句、かな女句、華の一句、季音雪欄同人の特別投句、季音抄、水明抄の句の掲載、各種大会の案内やお知らせ及びインターネット句会の内容です。是非ご覧になってみてください。「水明俳句会」で検索できます。尚、各号の水明誌そのものも掲載しており、必要なときにスマホやパソコンでご覧になれますのでご利用ください。

インターネット句会は、水明会員と水明以外の外部の人が自由に参加できる句会で、現在四十数名が参加・約九十句が投句されています。毎月二〇日までに当季雑詠での二句を投句します。二十一日には清記がアップされ、二十五日までに特選一句と普通選二句及び選評を返信すると、二十六日に選句の結果と選評がアップされます。

投句の方法は、至って簡単でホームページのインターネット句会の投句フォームと選句・選評のフォームから参加いただければ結構です。

ご自分の句がどう評価され、どれだけの人に選をしてもらえるか、とても楽しく俳句を学べるツールになるものと確信します。特に、水明以外の参加者による選と選評は水明の中では得がたいものです。

インターネット句会では、個人別に年間の特選と普通選の数を集計して、最多得点者には粗品を進呈しています。特選は二得点、普通選は一得点でのカウントです。因みに、二〇二二年度、二〇二三年度の高得点者は左記の通りでした。
 ☆二〇二二年度
 ☆二〇二三年度

- | | |
|----------------|-----------------|
| 一位 荒 一葉 (一四二点) | 一位 後藤充孝 (二一三点) |
| 二位 河野凡士 (一〇七点) | 二位 新 曆文 (二〇八点) |
| 三位 後藤充孝 (九〇点) | 三位 丸山マシミ (九三点) |
| 四位 新 曆文 (六四点) | 四位 古賀由美子 (六九点) |
| 四位 檜鼻ことは (六四点) | 五位 青木鶴城 (六七点) |
| 六位 丸山マシミ (五八点) | 六位 岡田芳春 (六二点) |
| 七位 霜 里 (五四点) | 七位 渋谷さいち (六一一点) |

(※ゴシックは水明以外の会員)

二〇二三年度の第一位、第二位、第三位は残念ながら水明以外の会員の方でした。尚、インターネット句会員の約半数が外部の会員です。もつともつとたくさんの水明会員の参加を望むとともに、高得点者に水明会員が名を連ねることを期待いたします。

(青木鶴城)

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

2024年3月号

特集 名編集長ここにあり

○巻頭／俳誌の歴史 伊藤一郎

○編集長へのQ&A

「円虹」辻桂湖 「沖」辻美奈子

「銀化」潮田幸司 「銀漢」武田禪次

「古志」辻奈央子 「澤」望月とし江

「鷹」高柳克弘 「岳」小林貴子

「松の花」松尾清隆「若竹」田口風子

「森の座」小川雪魚

〈夕ラビレ〉俳句界NOW 田島和生

特別作品21句 石井いさお「煌星」

特集 俳句で町おこし

○松山市「俳句ポスト」 家藤正人

○荒川区「俳句のまち」宣言 対馬康子

○群馬 夢二忌俳句大会 木暮陶句郎

○俳聖・芭蕉による町おこし

※セレクション結社 「窓の会」坪内稔典

私の一冊 松本勇二「虎杖」

佐高信の甘口で「コンチハ！」



対談 日野美歌(演歌歌手)

「俳句界」投稿欄 一流選者13名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性がります。



株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳句

3月号
予告

2月24日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑧

特別作品 池田澄子・山口昭男・山西雅子

大 特集

類想、自己模倣に 陥らない作句術

▼総論 類句・類想との向き合い方……本井英
「各論」似て非なるもの(切れ/抒情/私性ほか)
▼ここに注意 類句・類想、自己模倣の原因を探る
▼作句法 ▼私の自己更新

特集

昭和の俳句

座談会 高野ムツオ・西村和子・
野崎海芋・西村麒麟 / 昭和
俳句史 川名大インタビューほか

六か月連続企画!

全国結社マップ vol.6 中国・四国・九州・沖縄

第12回 星野立子賞発表!

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子 報

雪白の鶯の矢羽根や神渡
をんなしやうぐわつ賢妻きほひ羽目外す
黒羽根のはらり一枚寒茜
朝時雨出しなまふ雨合羽
巾上げの考はセピアや冬座敷
待ちをれば隠れ家めきぬ冬座敷
母と寝る一年振りの冬座敷
不意に出た結婚話冬座敷

マスマ
千 祐
はるみ
卓 郎
徹 平
治 子
拓 真
和 子

——以上特選

羽搏きの聞こゆる鬼門枇杷の花
花嫁を待つ光あまねき冬座敷
羽箒や羽ありし日の鴨想ふ
寒林に羽搏くもの気配かな
結納の儀や談笑もるる冬座敷
雪虫は天使の羽のごときかな

治 子
順 子
由紀子
喜 恵
チアキ
拓 真

求愛の丹頂鶴や羽拡ぐ
冬童昭和の残る羽村駅
鷹匠や羽一枚に威厳あり
帰国便が目指す羽田や師走の夜
冬座敷隅に座布団積んである
円窓に明かりぼんやり冬座敷
師走にも羽根が生えたか街忙し
黒杵の葉書読み入る冬座敷
滾る湯のほのかな音や冬座敷
冬座敷足音高くして声を
心まで包み切れない羽根布団

稀 香
亮 一
京 子
徹 平
延 昭
はるみ
和 葉
卓 郎
マスマ
千 祐
和 子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

しづかなる墓地の彼方に山眠る
山行の友いま何処山眠る
山眠り満天の星覚醒す
心地好き自転公転山眠る

りこ
峰 雄

スカイツリー聖樹となりて星まるとふ
新しきブーツも踊るクリスマス
年長けて旧友と語らひ年惜しむ
飢餓の子の黒い瞳やクリスマス
龍年を手ぐすねひきて熾り炭
後追ひの日記の頁山眠る

いちい
敏 江
みどり
士 史
鶴 城

——以上特選

ホームルームの聖歌の記憶二つ三つ
山眠りかすかに動く命あり
新しき時はじまりクリスマス
愁嘆も悔ひもひとまづ山眠る
武士の霊鎮め山城山眠る
山眠る通行止の白き杭
ぼつぼつと喪中の葉書山眠る

以上特選
峰 雄
りこ
士 史
いちい
敏 江
みどり
鶴 城

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 報

生粋のスカイツリーや都鳥

喜 久



暮早しオムニバスめく山手線
橋三つ越ゆる逢瀬や都鳥
赫灼と雲よせつけず冬の月
差し潮に雲しむ鱸綱都鳥
都鳥河岸に零るる木遣唄
浜町河岸を小粋に流す都鳥

萬蝶 康世 徹雄
〃 〃 昇

短日やたら遅るる路線バス
応へなき問ひが山積み都鳥
墨東に荷風尋ぬる都鳥
マフラーを渡せぬままに別れけり
都鳥みな京を向き墨田川
半玉のお座敷がへり都鳥
産気づく厩舎そぞろに暮早し
此の先は昔色街都鳥
みやこ鳥言問橋の影に浮き
落葉掃く巫女のゆかしき赤袴

以上特選
雅夫 千祐 星歩 理恵 順子 喜久 萬蝶 康世 徹雄 昇

第四例会 (浦和)

寒鯛や出世頭も鄙暮し
坂を押すパンク自転車冬の雲
落日を容れて耀く冬の雲
冬の雲テントを畳むサーカス団
寒鯛を捌く親爺の出刃光る
新ビルに突き上げらるる冬の雲
借老の夕餉にとろり鯛大根

境延昭 石井喜恵 翔太 延昭 由紀子 修 光治 昇

冬の雲両手に包む缶珈琲
暁光や鈍色に染む冬の雲
冬雲や怒濤逆巻く親不知
鯛起し指の欠けたる石仏
越中の峰峰白し鯛大漁
倒影の公孫樹にかかる冬の雲
鉄塔へ重く垂れ込む冬の雲
鯛を糶る潮錆びの声有機海
美しき眼揃へて鯛の競り
ジャンケンのいつも後出し冬の雲
暁光やまだらに染まる冬の雲
空展く庭師いづく冬の雲
煮くづれし鯛のあら煮に里の酒

喜恵 以上特選 でん治 昇 恵子 翔太 由紀子 玲子 マスミ 寛治 光子 延昭 曆文 喜恵

第五例会 (浦和)

気高さや出雲大社の冬桜
枯野ゆく胸のダイヤにそつと手を
冬桜菓箱のやうな投句箱
月光の輝き渡る大枯野
蛇行する河沼と枯野原
目的地見えて遠し大枯野
見齋かす枯野を包む夕茜
つつましく皇女の墓に冬ざくら
川中島の枯野に残る合戦場

梅澤佐江 河野はるみ 美佐尾 水尾 玲子 義子 佐江 以上特選 宣子

蒼天へ凜と枝張る冬桜
冬桜ゆれると消ゆる白さかな
枯原は銀の海ごと陽が昇る
枯野星生さよ生さよとまたたけり
不器用に生きる人生冬ざくら
夕日浴び黄金に滲む枯野かな
白壁の続く坂道冬桜
今生を悔ひなく生きむ冬桜

玲子 千祐 水尾 義子 知子 美佐尾 佐江

若松例会 (京橋)

江戸小紋の触るる糸底冬館
居酒屋の鉢巻親父爛熱し
赤き糸たぐれば夫よ神の旅
糸車廻し終ふるや年の果
熱爛や端唄を耳に肘枕
小春日や糸のとほらぬ針にらむ
糸女工抜くる野麦は雪の道
ずるいよね熱爛の言うさようなら
相席のひとつと熱爛酌む夜ふけ
熱爛やふと口ずさむ家庭訓
冬日さす「もしもしあのね」の糸電話
熱爛や心延へ良き若女将
熱かんで釣りに娘と焼鳥屋
糸杉にゴツホの筆や星冴ゆる
熱爛の頃合計り鱈を焼く

正木萬蝶 石田慶子 佐江 千祐 京子 千春 京子 慶子 以上特選 星歩 慶子 千春 鶴城 はるみ マスミ 千祐 京子 佐江

熟爛をゆつくり冷ます厚化粧
二度咲きや赤き糸切る糸切齒

ひろこ
萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

大枯野かつて零戦離発着

玲子

日がな鳴る摩耶の風鐸北風
返り花齡はなれし恋をして

ゆら女

若きらの通りて枯野生き生きす

洋子

軒先に月が来てをり神楽宿

和子

待望の秘仏公開帰りに花

道子

キツネ面付けて入りたき枯野かな

早苗

断層の露岩へ一葉散紅葉

〃

——以上特選

行き行けど風音ばかり枯野原

千津子

短日や沖の泊船灯をともし

玲子

華やかに狐の嫁入り大枯野

ゆら女

歳末や鴉にまでも急かされて

洋子

大銀杏一夜哭きたるこの落葉

和子

愛猫の写真机上に漱石忌

道子

晴れし日の枯野の中を生家へと

千枝子

情報が多きに惑ふナビ小春

千世子

冬紅葉風のくれたる髪飾り

満耶子

一歩づつ踏みしめ歩く枯野かな

さわゑ

思案しつづ三年日記買ふ米寿

嶋田洋子

渋柿の渋抜く術も妣譲り

早苗

昔話あれこれ 35

『大鏡』大臣列伝 時平

観音寺の鐘

筑紫では道真は居所の門を固く閉ざして謹慎していた。

太宰の太式の役所は、道真の居所からは遙かに離れていたが、役所の屋根の瓦は見たくもないのに、目に入るのであった。

そこで作った漢詩は

都府楼纒看瓦色

観音寺只聴鐘声

都府楼は纒に瓦の色を見る。観音寺は只鐘の音を聴く

（大意）遙か遠くに見える大宰府はわずかに瓦の色を眺めやるばかり

近くの観音寺へは詣でもせず、鐘の音に耳を傾けるばかりである）

恩賜の御衣

また、九月九日に菊の花を見ながら、去年の今宵、内裏での菊の宴で、道真の

作った漢詩を帝が大層感動されてお召し物を下された。その御衣を筑紫に持って来たがそれを手にして

去年今夜侍清涼

秋思詩編独断腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜余香

去年の今夜清涼に侍す

秋思の詩編独り腸を断つ

恩賜の御衣今此に在り

捧げ持ちて毎日余香を拜す

（大意）去年の今夜は清涼殿で重陽の宴が催され、私は「秋思」という題の詩を作り、ひそかに断腸の思いを述べたが、帝からお褒めを頂き御衣を賜った。その御衣は、今ここにあり、毎日捧げ持つてその残り香を拜している。）

道真は、自分の着せられた濡れ衣が乾く術が無いことを嘆きながら

（天の下乾けるほどのなければや着てし濡衣干る由もなし 道真）

大宰府で、延喜三年二月二十五日死去した。

（つづく 丸山マスキ）

各地句会



新樹の会 (浦和)

やり過ぐす不意の一難年忘れ
 年忘れ昭和残党意気盛ん
 似たやうな黒靴並ぶ忘年会
 債鬼なぞ恐るに足らず忘年会
 忘年会磨きがかかる隠し芸
 年忘れ年毎に増す物忘れ

俳句の手ほどき (岩槻)

困民党の駆けし秩父の山眠る
 山彦に託けて山眠りけり
 冬日和秩父稜線端整に
 土器を投げ俯瞰をしたる山眠る
 山眠り筈が返す「シーハイル」
 黒黒とただ黒黒と眠る山
 恐竜の骨の真贋山眠る
 廃線の信濃トンネル山眠る

微雄 平通 道を 風子 鶴城
 延昭 佐江 水尾 義子 徹平 忠男 翔太 美子

若楠句会 (浦和)

鋭きは熊の爪痕眠る山
 山眠る添ひ寝するかに山里も
 整列のランドセルゆく冬の朝
 煤逃の亭主整髪浮世床
 山眠る新たな装ひ秘めしまま
 眠る山筈となりてチェンソー
 酔の牡蠣や少し大人の心持ち
 牡蠣くへば縄文人の心地かな
 年惜しむ湯屋の人影遠ざかる
 年惜しむ旋律永遠に逝きてなほ
 牡蠣フライ大はあなたに取り分けて
 全集の菌抜けの在り処年惜しむ
 小屋仕事あかざれ何ぞ牡蠣を剥く

小梅の会 (浦和)

風花や訛の交じる魚市場
 新聞の落つる音聞く冬の朝
 かはりゆく空日の出待つ冬の朝
 北の浜牡蠣の怨みに舌焦がす
 雪女郎軒端の陰の薄化粧
 たかなな俳句会 (川口)
 巫女舞の鈴音にあはせ銀杏散る
 あるがまま過ぐす余生や年惜しむ

幸代 桂子 久美子 卓郎 卓アキ かつ子
 直子 京子 風舎 葉子 真由美 鶴城 宏治
 進 隆文 恵子 隆然 道を

柿の木塾 (浦和)

入相の鐘を聞きつつ年惜しむ
 イマジンの曲が聞こえず年惜しむ
 膝掛の色は紫伯母百寿
 膝掛の過去の温みを手繰り寄す
 紅の膝掛選ぶ美容室
 ブルースの俄ドラムス年惜しむ
 鴨の声やがて鎮もる沼の面
 千里来る鴨を抱き寝の山上湖
 鴨の声古城の中の喫茶店
 鴨の水脈すれ違ふとき消し合ひて
 敷柑子茶室の裏の火消壺
 鴨鍋や肝心な人未だ来ず
 敷柑子街のざわめき風に乗る
 鴨が鴨追ひ掛く遊び切りもなし

水明熊谷句会 (熊谷)

洒落つ気もまだ残り居り去年今年
 献血をして成人の日の証
 心音の奏つるリズム去年今年
 篝火の爆ずる参道去年今年
 鈍色の寒江渡る羽越線
 LPでイブ・モントンを去年今年
 追憶の越路吹雪よ冬重
 成人の日や彼の日の雪に母が逝き

義子 謙一 小麦 のり子 静香 鶴城
 章嘉 昇 節代 水尾 かつ子 和葉 恵子 和子
 秀子 燈女 栄子 徹平 卓郎 風子 道子 茂子

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

熟爛や見掛け倒しの泣き上戸

熟爛や手持ち無沙汰に聞く惚気

木枯が寺の大樹と押問答

初霜や両手で包む缶コーヒー

友の墓眠る故山と差向ひ

神戸大池句会 (神戸)

遅々としてやつと山の端冬の雲

冬の海またぎ宙ゆくモノレール

初霜や皇帝タリヤ項垂るる

若 鮎 句 会 (浦和)

水溜るや吾が手の平の生命線

枝先に雀あやすや冬紅葉

風吹けば喝采めきて冬紅葉

朝日浴び今日も生きなむ冬紅葉

緑道をかららと舞ひて冬紅葉

冬紅葉行くささぎさきの道しるべ

川涸れて星の未来を思ひけり

白髪に留まりてをかし冬紅葉

流れくる歓喜の楽に暮を知る

空つばのゴンドラの行き冬紅葉

冬紅葉鳥や獣が巫山戯をり

冬紅葉仄かに映す水香江

顔見世や楽日の父子見栄を切る
あと幾残る紅葉の鮮やかさ

円 卓 の 会 (浦和)

伏せ徳利の肩を撫づれば冬北斗

味噌汁はインスタントのクリスマス

ちり紙交換待つ数へ日の日暮

冬桜さつと私の応援団

銀杏枯る嵌め絵のごとき時計台

のら猫に幾多の名あり日向ぼこ

密やかになほ密やかな冬桜

狒犬のおだやかに座す冬日和

快復の兆し舞ひ込む冬桜

鉄瓶の湯気の佗び寂び冬桜

水明濤つくし句会 (大阪)

本殿まで胸突き八丁冬桜

洗ふ手に洗ひ残しや十二月

傾きは地軸となれる冬りんご

日輪はビルの向ふをクリスマス

阜 月 の 会 (浦和)

十二月八日受電のトラトラトラ

吞兵衛の歳を忘るる忘年会

おほらかに隙間風入る大伽藍

羽ひろげ受胎告知や冬の朝

鶴 城 喜 夫

京 子

拓 真

月 一

亮 一

修

輝 翠

道 太

翔 太

静 香

鶴 城

年忘れ殻を破つて無礼講
足元から崩れゆく忘年会

冬の星友の知らせに受話器置く

被災者のプレハブに棲む隙間風

天井の煤を払ひぬ年用意

涙して受け取る手紙冬の星

野 ば ら の 会 (浦和)

山茶花の咲き継ぐ里の校舎跡

せせらぎの音のみ聞こゆ冬の水

研ぎ上げし庖丁浸す冬の水

ピンヒール山茶花の道急ぎ過ぐ

亡き犬の見え隠れする山茶花に

ミモザの会(横浜)

ピリカピリカおごそかに熊祭り

ポインセチアの並ぶ出窓の骨董店

山茶花のはらはら散りて色の道

白髪の話しごちやごちや忘年会

銃口を睨む熊の母性かな

熊出没戦場ヶ原鈴つけて

冬夜長ねだられ読むはくまのプー

息白くボール蹴る子の前へびよん

写経の夜色即是空年惜しむ

人里は御馳走あふれ親子熊

順 子 紀 子 静 香

曆 文

美 佐 尾

き い ち

栄 子

茂 子

秀 子

夏 江

み き 子

史 代

慶 子

栄 子

由 美 子

萬 蝶

亜 弥 子

美 千 子

玲 子

詠 子

千 春

山茶花 (浦和)

鯛焼をかぶりつく児の笑顔かな
冬の朝板前修業の下駄の音

和歌山水明句会 (和歌山)

追つてくる熊野古道の夕時雨
木枯や軒校生は又三郎

つやつやの落葉を拾ふ医者帰り
情報が多きに惑ふナビ小春

山眠る男密かに鎌を研ぐ
釣糸をじつと眺むる冬の川

聞き慣れし声を探すや帰り花
大銀杏黄葉の霊気ふりかぶる

芙蓉句会 (浦和)

三味聴こゆ置屋の裏に枇杷の花
冴ゆる月従者のやうに星二つ

詫びしけれ月夜の屋台晦日蕎麦
病室の窓に滲むや冬の月

蝌蚪の会 (浦和)

冬晴や数多^{あまた}訃報のはがきくる
しばらくは落葉伝ひに沢の音

冬晴や画集探しの古本市
ブティック跡虚る硝子に彩落葉

美江子
マスマ

和子
道子

千枝子
千世子

満耶子
さわゑ

洋子
廼代

道子
税子

美子
仁

ひさの
風舎

元美
英子

冬晴や車窓はきらら海と空
ユーミンを聴きに冬晴新都心
盆栽の銀杏落葉や黄金色
梢から地まで落葉は夢をみる
釣糸の揺るる船上冬うらら
冬晴や古本市の品定め

若狭水明会 (若狭)

皮むきは夫の役割栗の飯
缶けりに探偵ごっこに栗の飯

首すちに背なの子の息秋深し
栗飯の弁当温きバッグかな

渋皮を爪に残して栗ごはん
遅しき母の二の腕栗ご飯

ちと食べてやがて頬張る栗ご飯
深秋や山里起こす寺の鐘

微笑みの母の遺影に栗御飯
鶴川山百合句会 (町田)

ジャンパー着れば我も無頼派古書の街
戦争のない日此処だけ木枯来

マフラーの別れはいつも背を見て
あれこれ混ざる風の吹き溜り

冬帽子飛び出してゐる夫の耳
ストールひっかけ薬局まで走る

冬帽子目深に指名手配めく

礼子
さち子

宣子
鶴城

郁子
寛久

登美江
祥子

和風
初花

ことは
八重子

保人

雄二郎
月を

史代
広子

由美子
千春

萬蝶

退院の父に被せる冬帽子
初孫に不器用祖母の毛糸帽
散歩中の松間木枯し早帰り
張込みの刑事コート襟立てて

櫟の会 (浦和)

枇杷咲くや真昼の月の透けて見ゆ
閉ざされし二階の雨戸枇杷咲けり

花枇杷や孤老さすらふ独り旅
シャンソンや白鳥眺むティールーム

白鳥の飛び立つ瞬間越辺川
気位は王妃さながら大白鳥

花枇杷や今日は一人で試歩の人
珊瑚の会 (浦和)

習ひ立ての夫の手打ちの晦日蕎麦
寒禽や遠まなごしの羅漢様

それぞれに秘伝のありて晦日そば
鐘の音やきつねの甘き晦日蕎麦

寒禽や鋭声一発谿に消ゆ
マイ箸は若狭塗りな晦日蕎麦

寒禽の枝に集まる日和かな
家族てふ小さきしがらみ晦日蕎麦

永らへて今年もいただく三十日蕎麦
忘れものしたやうな気が晦日蕎麦

晦日蕎麦八十路半ばをふり返り
割箸のささくれ抜き晦日蕎麦

理恵
美千子

あつ子
朋子

裕誌
富子

文子
治子

千重子

喜恵
マスマ

水尾
昇

光子
恵子

史代
広子

和子
和子

和葉
かつ子

節代

さざきサークル (浦和)

ビル風の凧となる逢魔時
無念無想ひかりの中を浮寝鳥
池に浮く楢田のボール浮寝鳥
木枯の泣く夜を熱き仕舞風呂
木枯や袋小路に酒場の灯
凧や厨に貼りし火伏せ札
バス降りる一步に凧容赦なく

あゆみの会 (浦和)

冬の田や向かうにビルの影微か
冬の田や皇帝ダリア咲く狭庭
冬田道婆の手足の押し車
鐘の音に冬田の農夫手を合はず
辞書並ぶ障子明かりの父の部屋
冬の田にトランペットの音痺れ

蘭の会 (浦和)

出納の帳尻合はぬ霜夜かな
千両や極細筆で書く手紙
語り部の津軽民話や冬の旅
ねんねこや遠き温もり死語となり
饒舌に祝意述べたる実千両
山寺や石段の霜踏み惜しむ
千両や色なき庭を赤く染め

昇 光子 啓子 健司 俱子 和子 重子 山遊 俱子 啓子 藻好 さよ子 珪子 律子 伸子 小麦 風舎 寿夫

鳥は何故赤い実が好き実千両
木々に霜パスタに薄く粉チーズ
千両を目掛けて来たり白子鳩
千両を活けて花台に琴の爪
躑に鳥の遊びて実千両
満天の星の形見や今朝の霜

雛の会 (浦和)

恰幅の良き白菜を今出荷
未来ある子等に届けよ聖樹の灯
未完成でふ完成冬のシンフォニー
生真面目に生きて白菜真二つ
冬銀河寺回廊のきしむ声
空耳に悠久の音冬銀河

青葉の会 (浦和)

手入せぬ里の枯芝花一輪
眠りたる秩父連山一望す
飛行機の左の窓に冬銀河
墓地の枯芝こがしゆく火の恐怖
つぎつぎに園児転がる枯芝生
小春日の接骨院は社交場
水子地蔵籠に抱き山眠る
年の夜や船接岸の港町
冬桜座敷へ向かふ左棹

夕峰 まりこ 風子 月を 鶴城 京子 公子 喜恵 燈女 輝翠 佐江 美紗子 和子 美智枝 洋子 公子 眞理 啓子 美子 輝翠

りんどう俳句会 (浦和)

ドームより洩るる歓声冬銀河
木曾馬の目よりこぼるる冬の星
開花しておしやべり楽し寒椿
伝言板に似たるスマホや冬の星
王道楽土何処にありや寒北斗
夏然と小粒のひかり冬の星
冬銀河未来を語りあふ茶房
冬うらら社にひびく「越天楽」
君を待つ有楽町の聖樹に灯
灰神楽立つる尼御前冬安居

櫻蔭句会 (浦和)

かな女句碑黄色に埋まる十二月
薪の火にいつぶくをして十二月
暗き朝急ぐ足音十二月
こぼれ行く砂のごと過ぐ十二月
友の死の喪中葉書や十二月
気掛かりを残したまや十二月
とめどなく続く戦禍や十二月
十二月第九に乗りて大鷲進
分針の音走り出す十二月
一斗樽白菜漬けしは怖き父
白菜を漬けて一息日の終はり

寛治 君夫 弘夫 治子 風子 徹雄 翔太 順子 まり子 卓郎 美智枝 公子 千恵 茂子 美子 眞理 久美子 多美子 由紀子 行雄 幸代

光が丘俳句教室（東京）

石焼諸今日も来てゐる交差点
焼芋喰ふ「忠臣蔵」の佳境なる

野菊の会（与野）

何時どこで老嫗なりし風花す
戸籍簿の大字小字冬座敷
つつがなく一日過せり干蒲団
いつの世も猫に癒さる漱石忌

芽吹句会（浦和）

空つ風達磨売る声攫ひゆく
赤城より風の礫や空つ風
紅深さままの落葉や流れゆく
黒帯や実りし朝の寒稽古
十二月八日高所にラジオ置き
空風に転け九十歳の肘手術
その音に琵琶の調べを落葉踏む
空つ風橋の小町を狙ひ撃ち

りそな俳句会（浦和）

さあ出来た皆覗き込む河豚雑炊
牡蠣雑炊にはか厨の実験室
またひとり薄墨便り師走かな
ふく雑炊笑顔で締める宴かな

理 恵

美代子

和 子

清 子

光 子

千重子

玲 子

チアキ

修

ひろこ

富 子

久美子

道 を

建治郎

マスミ

久美子

暦 文

極月や何故か込み合ふ古着市
仕事辞め新聞友に師走かな
風の音喰る師走の歌舞伎町
雑炊を吹きやる母の無心かな

寛 治
道 勲
雅 夫

めだか句会（浦和）

ひとつだけ心に決めて年の暮
大皿の最後の柳葉魚じゃんけん
年の暮貧乏神も神のうち
地球儀の埃払ひて年の暮
柳葉魚焼く尾頭付きの空威張り
柳葉魚描く高橋由一になりきつて
古伊万里に威張る柳葉魚の一尾かな
柳葉魚食ぶ焼くも揚ぐるも頭かな
背を向けてトウドウリスト年の暮

妙 子
敦 子
久 夫
六 弦
知 子
月 子
鶴 城
はるみ
三 茅

☆

☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作 品] 5句 [受講料] 1,000円

[方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和6年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和6年2月末日（発行所必着）
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞選考委員と各地区委員の選考結果を基に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（9名）

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	保坂翔太
青木鶴城	日高道を	曲淵徹雄

各地区委員（4名）

大橋 廸代	檜鼻ことは	永野史代
五明 昇		

水明忌のご案内

- [日 時] 令和6年2月29日(木) 12時 受付
12時30分 投句締切
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR 浦和駅東口前パルコ 10 階)
- [投 句] ・「日永」(「永日」「永き日」「日永し」可)
・「当季雑詠」(従来の「秋子忌」および「如月(きさらぎ忌)」を含む)
各1句、計2句(※受付時にお投句ください)
- [会 費] 1,000 円
- [申 込] 2月5日(月)より受付け開始、20日(火)までに申込書に会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

「水明忌」は、長谷川秋子第2代主宰、星野紗一第3代主宰、星野光二第4代主宰の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。

- ※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※なお、コロナ感染症の状況に拠っては内容等を変更する場合があります。

事業部

「春の吟行会」のご案内

- [日 時] 令和6年3月30日(土) 11時 受付
12時30分 投句締切
- [会 場] 別所沼会館 / 1階大会議室
- [投 句] 当日の囑目2句
- [会 費] 2,000 円
- [申 込] 3月号に添付の申込書に会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

- ※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※会場には10時から入れます。ご持参の弁当などを食べていただけます。

主担当 第1例会、第5例会

風 声

○現代俳句十二月号——「現代俳句の風」欄

人疲れ買ひ疲れして年の市 井上燈女

写真屋の宥め笑はず七五三 岡田宣子

かさこそかさ櫛落葉の散歩道 小駒さち子

逆縁を伝ふるスマホ寒燈下 近藤徹平

父よ冬の嵐ですあなたの命日です 永野史代

測量や冬めく角度遠景に 野田静香

赫灼と宿す命や枯木立 宮崎チアキ

初講義マニキュア赤き師の源氏 田寺玲子

○現代俳句十二月号——「特集・永年会員記念作品」欄

三十年永年会員作品に

十六夜の笑ひころげる泥人形 石山かつ子

羊水に居て影もてり十三夜 菊池ひろこ

○くちら（中尾公彦主宰）十二月号——「受贈俳誌美術館」欄

真つ直ぐに引けぬ白線秋惜しむ 鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十二月号——「受贈誌御礼」欄

咲き了はるまでの花数さるすべり 鬼之介

○新月（松田碧霞代表）十二月号——「受贈俳誌紹介」欄

庭に八千草老いても可憐なるひとよ 鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）十二月号——「受贈誌御礼」欄

新しき童女の卒塔婆はつ嵐 鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）十一月・十二月号——「他誌拝見」欄

自転車の巡査を招く稲の花 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十二月号——「諸家近詠」欄

銀漢や小塚原はこの辺り 鬼之介

○苜（山本一步主宰）十二月号——「受贈誌の一句」欄

手開きの鱮の骨の美しき 梅澤輝翠

○山彦（河村正浩主宰）十一月・十二月号——「他誌紹介」欄

岡田薫氏による「水明」六月号の鑑賞

高浜虚子の高弟で、女性俳句の振興に尽力し女流俳人の

草分けであった長谷川かな女によつて昭和五年九月にさい

たま市で創刊。かな女以来四代の主宰を経て、平成三〇年

より、山本鬼之介が第五代主宰となる。

投句は旧仮名づかいを使用するようにと明記されている。

令和二年に九〇周年記念大会。ホームページも充実。通

巻一一一三号。月刊。

主宰詠（八句）より

健気よな卯波の磯を一輪車 鬼之介

水前寺清子の一步夏の星 〃

鼻の差の勝馬ゆけり青葉道 〃

同人作品（季音 雪・月・花）より

今日穀雨優しくなりし木々の棘

吹雪かと紛ふ柳絮に遊びけり

恐竜の骨を探しにこどもの日

おぼろ豆腐そつと崩しつ春惜しむ

清明や墨のにほひの命名書

水明集（山本鬼之介選）より

縄文の遺跡の空に雲雀鳴く

初音聞く古刹の長き男坂

城望む旅宿の朝餉蜆汁

花の雲に飛び乗る威勢逆上がり

山紫集（網野月を選）より

「古今伝授」を冠する太刀や桃の花

人形に涙のあとや桃の花

鼓笛集（大村節代選）より

修司の忌モカコーヒーの甘きかな

未だ温き小雀を掌に下校の子

旧仮名づかいで一物仕立ての句は、優しい韻を踏み実に趣深い。伝統を受け継ぎ涼涼と流れる様は美しい。

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和五年十二月三十一日現在 —

大塚茂子	10	口	加藤でん治	3	口
加藤イツ子	10	口	網野月を	100	口
福田千春	3	口	原田秀子	20	口
新 曆文	5	口	渋谷きいち	3	口
霜多光代	2	口	越田栄子	6	口
笹本啓子	5	口	鈴木康世	10	口
武田重子	6	口	近藤徹平	10	口
松本光子	10	口			
内田恵子	10	口			
			— 合計 —	213	口 —

水明発展基金募集のお願い

○ 一口千円 何口でも何回でも何時でも。

○ 振込口座番号 0013015145024

○ 領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。 水明俳句会・水明発展基金

後記

昨年は、コロナがインフルエンザと同様の第五種に、位置付けられたのに伴い、気をつければ集会も容認されるようになりました。それに伴い水明では、全国大会をはじめとして、若狭旅行や講演会等の行事を全て、恙無く行なう事が出来ました。そして特筆する事は、一人の事故者も出さず、参加者全員が楽しんで、行事を終了した事です。

そんな事をふり返って、のんびりとお正月を祝っております。すると突然テレビから、大地震のニュースが流れました。「石川県」です。「いや輪島」です。と次第に詳しく報道されます。

緊迫したアナウンサーの声に、ただただ不安が募り、呆然とテレビを見つめておりました。

それから早や一か月経ちますが、死者、行方不明の正確な人数も分からず、地中に埋まっている人が未だにいるかも知れないという現状に、心が痛みます。

ただ、個人的には、若狭の皆様、被害がなかったようですので、ほっとしました。

さらに福井県には、十五基もの原子力発電所が林立しているとか、その中には世界一？危険と言われる原発もあるとか。しかし、今回の地震で、原子力発電所に被害はなかったと報道されました。ほっと致しました。

今二月号では、恒例の年末回顧を八人の方にお書き頂きました。担当は二頁と少ないようですが、

一月号から十二月号まで取り出している作業は大変なものです。水明集の方々は、主宰に評を頂く機会がありますし、池田雅夫氏に頂けるかも知れません。季音の方は皆無なので、楽しみにしている方がいらっしやいます。お書き下さった方々ありがとうございます。

新殊賞の応募締切が二月末に迫っています。迷っている方も、どうぞご応募下さい。応募用紙は十二月号に挿入しましたが、失くした方は、総務部にご相談下さい。

(節代)

今月のはてな？

鳥兔匆匆(うとそうそう)

心延(こころば)え

託(かこつ)ける

甲上(といあげ)

松魚(かつお)

饑(ひだる)き

矩(のり)

海雲汁(もずくじる)

愕(おどろ)かす

花椰菜(はなやさい)

唐人笛(チャルメラ)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

頁 12 19 22 34 36 51 53 57 69

水明

令和六年二月号

通巻一一二一号

令和六年二月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区栗原町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

令和6年「水明忌」参加申込書

〈申込締切 2月20日〉

水明忌 2月29日(木)	会費 ¥1,000円	出席します
-----------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2024年2月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	()
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

季音投句用紙が変わりました

記入上の注意と記入の仕方

投句用紙の記入の仕方などについて、かねてより指導やお願いをして参りましたが、まだまだ徹底ができていないようです。改めて提出についての注意事項をお知らせ致しますので、十分ご理解の上投句をお願い致します。

雪・月・花のいずれかを
○で囲ってください

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

季音 雪・月・**花**

四月号 二月二十五日締切
※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

鉛筆書き不可
訂正は修正液等で
丁寧

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧版名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号) 090-1234-5678
氏名(本名) _____
年齢 _____ 歳

氏名(俳号)
姓 _____
名 _____

線に沿ってきちんと
切り取って下さい

俳号又は本名

会の長寿祝い等の参考にさせていただきます

水明集の投句用紙が変わりました

記入上の注意と記入の仕方

投句用紙の記入の仕方などについて、かねてより指導やお願いをして参りましたが、まだまだ徹底ができていないようです。改めて提出についての注意事項をお知らせ致しますので、十分ご理解の上投句をお願い致します。

都・市・町の該当居住
地を○で囲って下さい

線に沿ってきちんと
切り取って下さい

最上部の罫から間を開けずに楷書で丁寧に書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご利用下さい。

連絡先(電話番号) 090-1234-5678
氏名(本名) 年齢 歳

水明集 五月号 二月二十五日締切

さいたま	都(市)町	氏名(俳号)
姓	名	

鉛筆書き不可
訂正は修正液等で
丁寧に

会の長寿祝い等の参考に
させていただきます

俳号又は本名

季音抄

山本鬼之介

日向ぼこ生きる証の爪を切る
風花の黒門市に烏兔匆匆
築山の石笑ひ出す冬日向
翳りゆく窓辺に匂ふ榎櫃の実
生きざまに言ひ訳はなし山眠る
縁切りの絵馬は鎌形空つ風
美しき眼揃へて鰯の競り
分針の音の高まる十二月
都鳥みな京を向き隅田川
雪白の鷺の矢羽根や神渡
山彦に託けて山眠りけり
産気づく厩舎そぞろに暮早し
月光に瘤包まれて冬木立
小春日や糸のとほらぬ針にらむ
鐘の音に冬田の農夫手を合はす
賀状書くチャイコフスキー聴きながら
鏡なす湖を彩る龍田姫
赫灼と雲よせつけず冬の月

柚木治子
由良ゆら女
網野月を
石井喜恵
石山かつ子
大橋廸代
高島寛治
松井由紀子
大場順子
丸山マシミ
梅澤佐江
正木萬蝶
河野はるみ
石田慶子
笹本啓子
石川理恵
保坂翔太
曲淵徹雄

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

肌寒や金沢過る二つ川
 高層のビルは墓標ぞ冬夕焼
 碧天に稜線つづき神送り
 立冬や湯舟で伸ばすふくらはぎ
 リズム良く冬野を走る一輛車
 夜会巻のほつるるままに冬の霧
 神苑を掃く巫女ふたり神無月
 野菊一輪蔓の細工の背負ひ籠
 朴葉落ち寝物語の途切れけり
 荒畑に冬瓜ひとつ朝の雨
 気力限界けふは勤労感謝の日
 旅一座葛籠に朴の欠け落葉
 神立の先を導く道祖神
 囊中は自国名産神の旅
 釜上げの蛸売る女そぞろ寒
 四囲の街影絵にしたる冬夕焼
 大輪の花の香気や秋うらら
 焼鳥屋説教部屋の師弟愛

元田亮一
 反町修
 西幅公子
 新曆文
 丸屋詠子
 小林京子
 岡田宣子
 菅原真理
 清水桂子
 池田珪子
 篠崎紀子
 菅原卓郎
 皆川更穂
 森下山菜
 阿部幸代
 山岸久美子
 霜多光代
 千坂平通

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木和京子 林 京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中みどり 木 鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇雄 曲 淵 徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜恵修 反 町
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石 田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗

水 明

令和六年二月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第二号)

定価 一〇〇〇円